

# 香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 2

— 平成 5 年度 —

1994. 3

香芝市教育委員会

# 香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 2

— 平成 5 年度 —

## 例　　言

1. 本書は香芝市教育委員会（香芝市二上山博物館）が平成5年度に香芝市内で実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。本書には、国庫補助金対象事業以外の民間開発事業（受託事業含む）に伴う10件の埋蔵文化財発掘調査の概要を収録している。  
なお、平成5年度に実施した国庫補助金対象事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要についても『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報1』として別途刊行している。

2. 調査は、下記の組織で実施した。

### （1）現地調査

〔調査員〕 山下隆次、下大迫幹洋（いずれも香芝市二上山博物館学芸員）

〔作業員〕 藤田一夫、堀川四郎、吉岡藤雄、古山亨、森統、山野恵三

〔補助員〕 井上克子、蒲生玲子、古山早苗、島田良子、高井美智子、前川利江、藤村孝子、田中久美子、山口剛

### （2）事務局

香芝市教育委員会事務局

社会教育課 二上山博物館（館長 石野博信）

3. 本書の挿図の座標値は国上座標第VI座標系による。また、標高は海拔高で示している。

4. 本書の執筆は、それぞれの主な調査担当者が執筆し、日々に文責を明記した。

編集は下大迫が行い、遺物実測や製図は田中久美子氏の協力を得た。

5. 発掘調査を実施した各遺跡の遺構や遺物の写真・図面等の調査記録及び出土遺物等は香芝市二上山博物館（香芝市藤山1丁目17-17）所蔵のもとで保管している。

6. 現地調査及び本概報作成に関しては下記の方々より有益な御教示・御協力を賜りました。記して感謝致します。（五十音順、敬称略）

青木勘次（天理市教育委員会）、今津節男（樋原考古学研究所）、河上邦彦（奈良県文化財保存課）、小池香津江（樋原考古学研究所）、小泉俊夫、前園実知雄（樋原考古学研究所）、和田翠（京都教育大学）、宮原晋一（樋原考古学研究所）

## 本 文 目 次

1. 今泉遺跡第1次調査	(山 下) ..... 1
2. 錦田遺跡第7次調査	(下大迫) ..... 2
3. 狐井遺跡第8・9次調査	8
(1) 狐井遺跡第8次調査	(山 下) ..... 8
(2) 狐井遺跡第9次調査	(下大迫) ..... 12
4. 尼寺廃寺跡第3次調査	(下大迫) ..... 13
5. 藤ノ木丁遺跡第6～11次調査	27
(1) 藤ノ木丁遺跡第6次調査	(下大迫) ..... 28
(2) 藤ノ木丁遺跡第7次調査	(下大迫) ..... 29
(3) 藤ノ木丁遺跡第9次調査	(下大迫) ..... 37
(4) 藤ノ木丁遺跡第10次調査	(下大迫) ..... 37
(5) 藤ノ木丁遺跡第11次調査	(下大迫) ..... 38

## 図 目 次

図1 平成5年度発掘調査地位置図 (S = 1 / 50,000)	
図2 今泉遺跡調査地位置図	1
図3 錦田遺跡調査地位置図 (S = 1 / 6,000)	2
図4 第1調査区 SD-01・02遺構平面・断面図 (S = 1 / 250)	4
図5 第2調査区 SD-03出土縄文土器実測図・拓影 (S = 1 / 3)	5
図6 第2調査区 SD-03遺構平面・断面図 (S = 1 / 200)	6
図7 狐井遺跡調査地位置図	8
図8 狐井遺跡遺構平面・南壁上層断面図	9
図9 縄文土器1	10
図10 縄文土器2	11
図11 尼寺廃寺跡調査地位置図 (S = 1 / 3,000)	13
図12 尼寺廃寺跡第3次調査遺構平面・断面図 (S = 1 / 125)	15～16
図13 SE-01平面・土層堆積状況図 (S = 1 / 40)	17
図14 SE-01井戸枠内出土遺物実測図 (S = 1 / 4)	19

図15 SE-01井戸枠内出土墨書き上器実測図 (S = 1 / 3)	20
図16 SE-01井戸枠外上層出土上器実測図 (S = 1 / 4)	21
図17 柱穴内・SX-11・12、SK-10・12、SE-02出土遺物 実測図・拓影 (S = 1 / 4)	23
図18 調査区東側側溝出土軒半瓦実測図・拓影 (S = 1 / 5)	24
図19 SE-02出土軒平・軒丸瓦実測図・拓影 (S = 1 / 5)	25
図20 藤ノ木丁遺跡調査地位置図 (S = 1 / 6,000)	27
図21 藤ノ木丁遺跡第7次調査遺構平面図 (S = 1 / 300)	30
図22 SK-01・02遺物出土状況図・土層断面図 (S = 1 / 20)	30
図23 SX-01遺構平面図・遺物出土状況図 (S = 1 / 30)	31
図24 SD-01出土土器実測図 (S = 1 / 4)	32
図25 SX-01出土土器実測図 (S = 1 / 4)	33
図26 SK-01・02、包含層出土土器実測図 (S = 1 / 4)	35

## 表 目 次

表1 平成5年度発掘調査地一覧（国庫補助金対象事業以外）

## 図 版 目 次

図版1 今泉遺跡第1次調査・鎌田遺跡 第7次調査	図版11 尼寺廃寺跡第3次調査〔遺物〕
図版2 鎌田遺跡第7次調査	図版12 尼寺廃寺跡第3次調査〔遺物〕
図版3 鎌田遺跡第7次調査	図版13 藤ノ木丁遺跡第7次調査
図版4 鎌田遺跡第7次調査	図版14 藤ノ木丁遺跡第7次調査〔遺物〕
図版5 狐井遺跡第8次調査	図版15 藤ノ木丁遺跡第7次調査〔遺物〕
図版6 尼寺廃寺跡第3次調査	図版16 藤ノ木丁遺跡第7次調査〔遺物〕
図版7 尼寺廃寺跡第3次調査	図版17 藤ノ木丁遺跡第7次調査〔遺物〕
図版8 尼寺廃寺跡第3次調査	図版18 藤ノ木丁遺跡第10・11次調査
図版9 尼寺廃寺跡第3次調査	
図版10 尼寺廃寺跡第3次調査〔遺物〕	

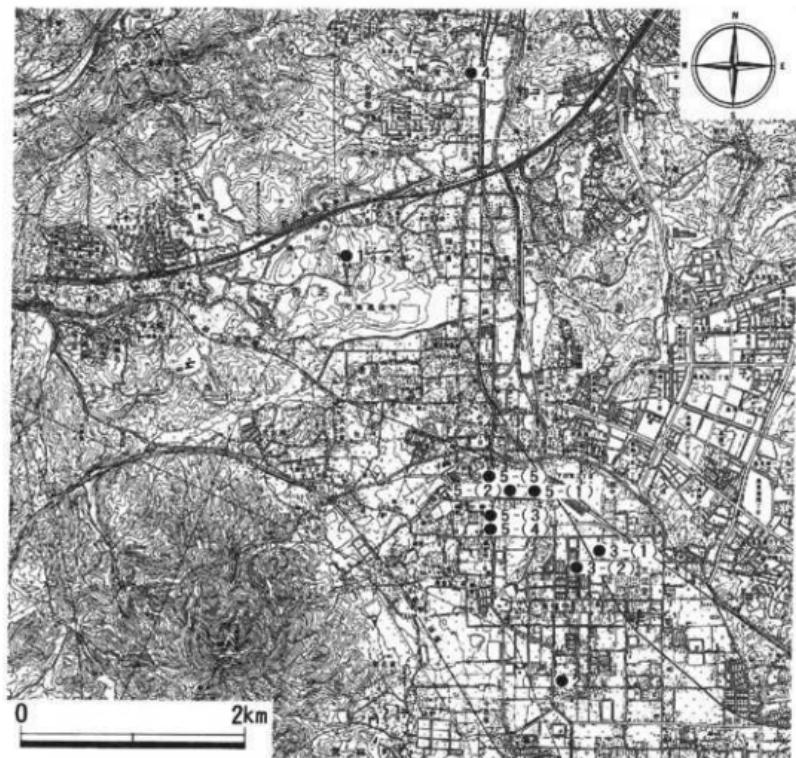


図1 平成5年度発掘調査地位置図 (S=1/50,000)

表1 平成5年度発掘調査地一覧 (国庫補助金対象事業以外)

No	遺跡名	調査次数	調査地	調査期間	開発内容	調査面積
1	今泉遺跡	第1次	今泉1044	5/11~6/11	鉄塔建設	25m <sup>2</sup>
2	鎌田遺跡	第7次	鎌田390-1他	11/11~1/17	店舗建設	668m <sup>2</sup>
3-(1)	狐井遺跡	第8次	五位堂507-1、508-1、559-1	8/31~9/30	宅地造成	80m <sup>2</sup>
3-(2)	狐井遺跡	第9次	良福寺215番地の36	6/21	公民館建設	10m <sup>2</sup>
4	尼寺廬寺跡	第3次	尼寺2丁目224番地	4/20~6/6	共同住宅建設	241m <sup>2</sup>
5-(1)	藤ノ木丁遺跡	第6次	狐井186-1	4/20~4/21	共同住宅建設	70m <sup>2</sup>
5-(2)	藤ノ木丁遺跡	第7次	狐井164-1	8/17~9/16	共同住宅建設	200m <sup>2</sup>
5-(3)	藤ノ木丁遺跡	第9次	穂壁3丁目94-1、95-4・5番地	1/15	共同住宅建設	20m <sup>2</sup>
5-(4)	藤ノ木丁遺跡	第10次	穂壁3丁目102番地	1/18~1/19	共同住宅建設	60m <sup>2</sup>
5-(5)	藤ノ木丁遺跡	第11次	下田西3丁目21-1番地	3/23	店舗建設	80m <sup>2</sup>

# 1 今泉遺跡第1次調査

調査地：今泉1049

調査原因：鉄塔建設及びアンテナ取付

調査期間：平成5年5月11日～6月11日

調査面積：約25m<sup>2</sup>

## I はじめに

今泉遺跡は香芝市今泉の集落西方、香芝市水道局周辺に位置する石器の散布地である。昭和44年に行われた遺跡確認踏査によってサヌカイト製石器が発見され、その存在が知られるようになった。<sup>1)</sup> 遺跡は現状ではほぼ独立したように見える東西約500m、南北約400mの丘陵に位置する。この丘陵の東斜面は後世の開墾によってなだらかに傾斜している。また、遺跡のほぼ中心と考えられる丘陵頂上には香芝市水道局の諸施設が建っており、さらに、その施設に通じる進入路によって南斜面の一部は改変を受けている。今回の調査地は遺跡のほぼ中心部で、水道局の施設の北に接する丘陵頂上の平坦地に位置する。



図2 今泉遺跡調査地位置図

## II 調査の概要（図版1-1）

今泉遺跡については、これまで開発等がなかったため調査は初めてである。そのため、当遺跡の詳細な情報がないことから層位や遺物の分布等などのデータを得ることを主眼に調査を実施した。

なお、調査地へは進入路がないため東側の尾根筋から調査地までの約150mの区間の雑木を人力で伐採し、堆積の状況を確認しながら重機で進入路を設けることから開始した。その結果、腐食土直下に地山の岩盤があり、腐食土と地山の岩盤の間にわずかな堆積層があることから、遺物は腐食土中か堆積層に含まれていることが予想された。

そして、進入路を設けた後、調査地に5m×5mのトレンチを設定し、おもに人力で慎重に掘り下げながら精査したが、遺構や遺物が全く検出されないまま地山の岩盤となった。その後、地山の岩盤が風化した層を一部重機で掘削したが、やはり遺物・遺構は皆無であった。

今回の調査地は周知の遺跡範囲の中心部にあたるが、周辺の地形から考えると調査地の東側に広がる緩やかな傾斜地に遺構・遺物が存在する可能性がある。

今後この地域における調査が進めば遺跡の性格や範囲等が解明されるであろう。

## 註 記

1) 小泉俊夫「先史時代」『香芝町史』香芝町

## 2 鎌田遺跡第7次調査

### I 遺跡の位置と環境

鎌田遺跡は奈良県香芝市の南端、鎌田小学校の周辺に位置する縄文時代から古墳時代にわたる複合遺跡である。遺跡は二上山麓東部から東・北東に向かって緩やかに派生する二上山扇状地の先端部を中心に展開しており、遺跡の北東約1kmには古墳時代後期の狐井城山古墳（全長約140m）や縄文時代前期～中期の石器生産遺跡と推定される狐井遺跡が、南西約1.5kmには、大和でも有数の縄文～弥生時代の拠点集落である竹内遺跡（北葛城郡当麻町）が所在する。

鎌田遺跡では小規模ながらもこれまで6次の発掘調査が行われており、各地区で大小の自然流路とともに、おもに古墳時代前期～中期の土器が検出されており、弥生時代前期の土器や縄文時代晩期に属する突帯文土器などが出土している。第5次調査では古墳時代の木製農耕具（ナスピ形直柄鋤）が出土しているのをはじめ、平成4年度の第6次調査では流跡から古墳時代前期の大型掘立柱建物の建築部材を転用した護岸構造や大量の土器が検出されて全国的に注目を集めた。<sup>1)</sup>



図3 鎌田遺跡調査位置図 ( $S=1/6,000$ )

## II 調査の概要

### (1) 調査の契機と経過

今回の発掘調査は、大型小売店舗建築のため、平成5年7月29日付で事業者（株式会社オーワ）から発掘届出書が提出されたことに起因する。香芝市教育委員会では、申請地が周知の遺跡である「鎌山遺跡」の範囲内に含まれることや、とくに大型店舗建物建設に伴う地下遺構へ影響が危惧されたため、事業者側と協議を行い、同年10月22日付で両者間で埋蔵文化財発掘調査に係わる委託契約を締結後、埋蔵文化財発掘調査受託事業の一環として発掘調査を実施することになった。

開発面積は8,600m<sup>2</sup>と非常に大規模に及ぶことから、とりあえず開発地の東・西・南・北端の計4箇所に一辺4×4mの試掘坑を設定して地下の基本層序の把握及び遺物包含層の有無確認のための試掘調査から実施した。

試掘調査の結果、古墳時代及び、弥生・縄文時代の遺物を含む遺物包含層は検出できなかったが、これまでの各地区的調査結果と同様、各試掘坑とも、いずれも著しく湧水性のある厚い砂層が介在していることから、開発地全域には何条かの大規模な旧河道が埋没していることが予想された。

試掘調査をふまえ、当調査ではこの時期不明の旧河道の検出を土層として開発区域西側に第1調査区〔東西全長28m×南北幅11m=308m<sup>2</sup>〕、同北側に第2調査区〔東西全長36m×南北幅10m=360m<sup>2</sup>〕の計2箇所に調査区を設け、遺構の検出状況によって順次調査面積を拡張することとした。

調査の結果、第1・2調査区以外に調査区の拡張は行わず、最終的な調査総面積は668m<sup>2</sup>、調査期間は平成5年11月11日から平成6年1月17日まで実施し、実質作業期間は45日を要した。

### (2) 層序(図4・6、図版3-1・4-2)

第1・2調査区とも堆積層序は若干異なるが、両調査区の基本層序は、概ね、①暗灰色砂質土層(表土層)、②黄褐色砂質土層(床土)、③黒褐色砂質土層(中世素掘溝群検出層)、④灰褐色砂層(中粒～粗粒砂層、洪水層)、⑤暗青灰色粘質土層(細～中粒砂混)で構成され、第2調査区では②層と④層の間に砂層が介在する。このうち、遺構(河道)を検出したのは⑤暗青灰色粘質土層の上面で現地表面からの深さは2.4mを測る。試掘坑で基盤層の確認のため、大型重機の掘削可能な現地表下約3mまで掘削したが、同様の暗青灰色系統の粘質土層の層域が広がるのみで安定した基盤層は検出することはできなかった。

③層以下、各所に砂層が介在しており、とくに中世素掘溝群を検出した③層前後には河道の氾濫に伴う砂層が厚く介在している。全体的に遺構を検出した⑤層を始め、付近一帯は暗青灰色系統の粘質土層を中心とした低湿な土壤から成っており、常に水の停滞した湿地的な様相を呈していたことが推定される。

各層とも全体的に遺物の包含率は低く、中世の耕作関連層と考えられる④層の黒褐色砂質土層中に若干の弥生土器や古墳時代の古式土師器、中世上器の細片がみられたのみで顕著な出土遺物は認められなかった。

### III 検出遺構

当初の予想通り、第1調査区で大規模な旧河道の本体〔SD-01〕を、第2調査区西側では第1調査区で検出したSD-01の支流と推定される小規模な河道1条〔SD-03〕を検出した。

また、第2調査区の東側に設けた試掘坑では河道の堆積層と推定される砂層を確認しており、開発区域内で合計3条の河道跡を確認している。そのうち本格的に発掘調査を実施したのは、第1・2調査区内で検出した河道3条である。以下、検出遺構の概要について簡略に記す。

#### 【SD-01】(図4、図版1-2~3-1)

幅約12.6m、検出長約8mの北東方向に流れる大規模な河道跡。深さは最深部では検出面より約3.6m（表土から約4.6m）を測る。現況では調査区中央部南側の中洲状の高まりを介してSD-01とSD-02に分流しているが、このSD-02の東側の岸部までを川幅の範囲と含めると、最大幅約17mの大規模な河道跡となる。

河道の堆積土は、各所に細～粗粒・礫などの砂層やシルト層、また、水流によって削り取られた岸部の暗青灰色粘土層ブロックや滯水的様相を示す腐食土等が入り乱れて互層を成しており、最終的に洪水砂層によって一機に埋没したものと考えられる。数点のサヌカイトを除いて出土遺物は少なく、河道の上限・下限を示す良好な遺物は出土しなかったため、明確な帰属時期は不明である。

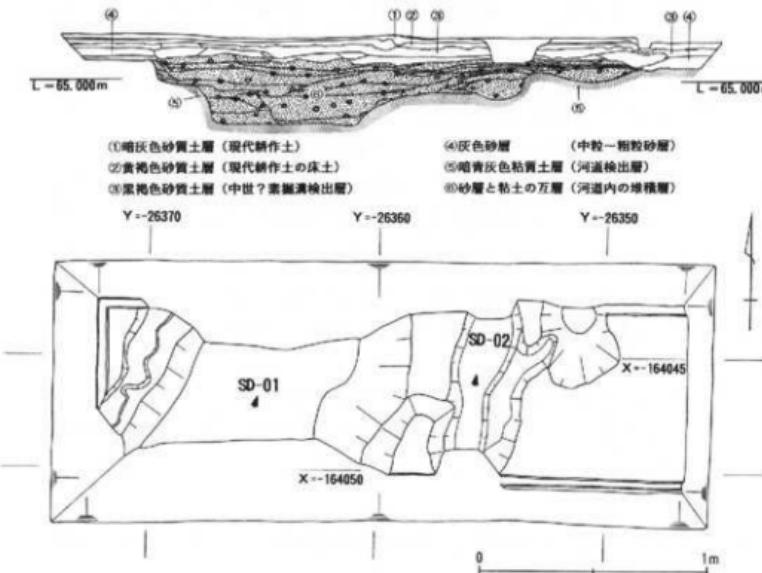


図4 第1調査区SD-01・02遺構平面・断面図 (S=1/250)

#### 【SD-02】(図4、図版1-2~3-1)

検出幅約3.6m、検出長約8m、深さ約1.1mの北東方向に流れる河道跡。SD-01本体の沖積作用の過程の中で形成された中洲によって旧河道の本体であるSD-01と分離されるが同一のものである。中洲本体の上層は砂混じりの暗青灰色系統の粘質土層で形成され、中層以下は灰色系統の細粒～粗粒の砂層の互層で形成される。

SD-02の埋土は中～粗砂層の單一層のみで、河道の氾濫に伴う洪水によって一機に埋没したものと思われる。堆積土中から遺物は出土しなかった。

#### 【SD-03】(図6、図版3-2~4-2)

検出幅約2.8m、検出長約11m、深さ約1.3mの北東方向に流れる小規模な河道跡。河道の堆積土は、灰色・黄色系統の細粒～中粒砂層の互層からなり、河道の壁面は鉄分の沈着により、鋼状を呈する。堆積土層中からはこの流路の帰属時期を示すものであるかは不明であるが、埋没層の黄灰色シルト層から、上流の当麻町域から流されて来たものと推定される縄文時代前期の北白川下層II B・C式土器の口縁部破片2点と縄文時代と推定される無基の石鐵1点（全体の1/2程度残存）が出土している。

#### IV 出土遺物 (図5、図版4-3)

出土遺物はサヌカイト製石器の破片をはじめ、古墳時代の土師器や須恵器、中世土器が出土しているが、いずれも細片ばかりで図示し得るものは少ないが、特記すべき遺物として第2調査区のSD-03から出土した縄文時代前期の北白川下層式に属する縄文土器片がある。

1は北白川下層II C式土器の破片である。上方と下方に2条の貼付突帯が巡らされており、突帯部に刻みが施される。

2は北白川下層II b式土器の口縁部破片である。口縁部上方には連続して0.3cm間隔毎に半截竹管によるD字形瓜形文が施される。

1・2ともいずれも摩滅が著しいため、調製は不明であるが、色調は黒褐色を呈し、胎土に雲母を多く含む。縄文時代前期に相当するものと思われる。

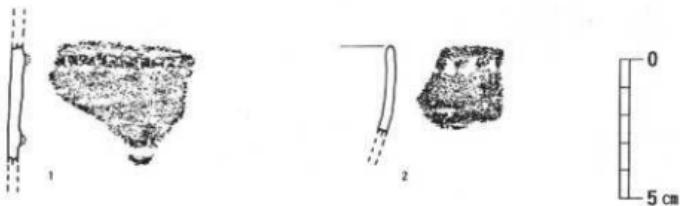


図5 第2調査区SD-03出土縄文土器実測図・拓影 (S=1/3)

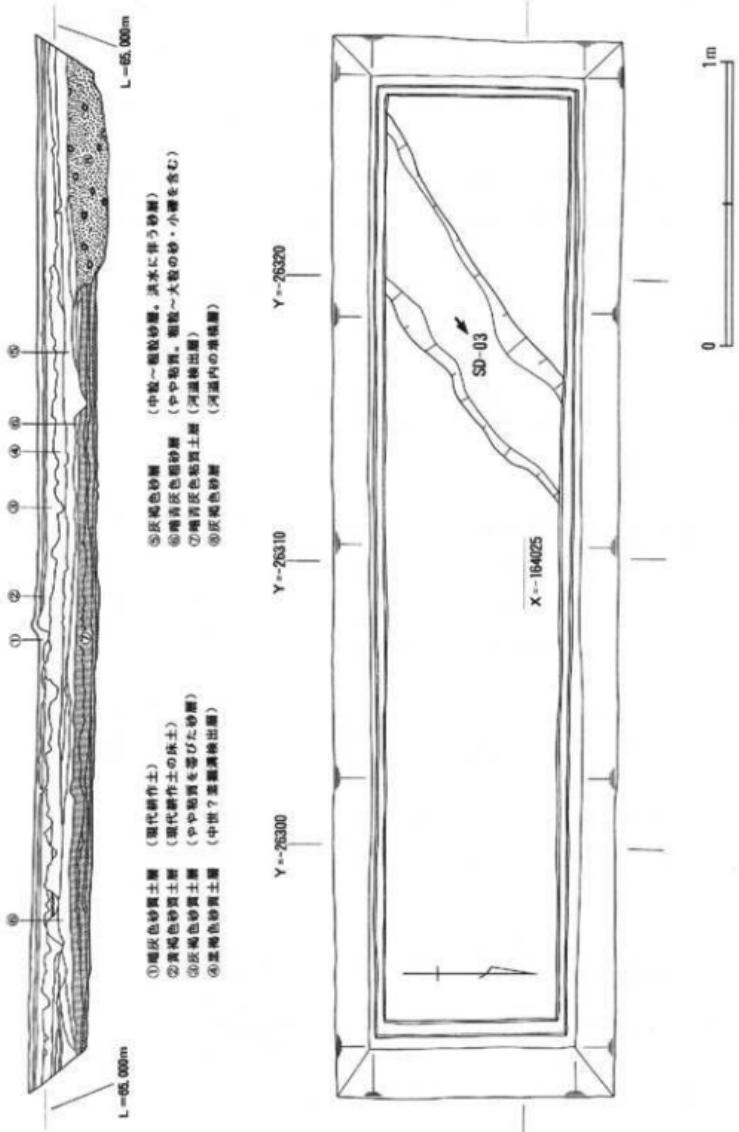


図6 第2調査区SD-03遺構平面・断面図 ( $S=1./200$ )

## V まとめ

第6次調査で弥生、古墳時代の流路跡から土器類とともに建築部材などの多量の木製品が検出されていることから、これらの諸遺構に関する遺構が検出されることが期待されたが、これらに関する遺構や遺物包含層は確認されず、当調査地にまで及んでいないことが判明した。

顯著な遺構や遺物が確認されなかったものの、北東方向に流れる河道跡3条を検出した。そのうちの1条はその規模からこの地域を流れていた旧河道の本流であったものと推定される。しかし、これだけの大規模な河川跡にもかかわらず、残念ながら遺物はほとんど出土しなかったため、これら3条の旧河道の帰属時期や前後関係等は不明であるが、上層の堆積状況や上質より3者はほぼ同時期の河道跡と考えられる。

かつて、二上山麓周辺においてこれほど大規模な旧河道を面的に完掘した事例はなく、付近の地形や古環境を考察するうえでも重要な知見を得ることができた。

さて、調査地付近の地理図を参照すると、今回の調査地の小字名は「人安寺」であるが、付近には「川ハタ」や「ス川」、「妙河」などの河や砂・洪水等に関連した小字名が散見している。

また、上流の南西方向には旧河道の痕跡と考えられる不自然な地割の亂れがあり、この地割の乱れの方向が今回検出した河道の方向とほぼ一致していることから、とくにSD-01については付替前の旧熊谷川の本流か、あるいは、支流の一部であった可能性が強い。

今回の発掘調査やこれまでの調査知見を総合すると、鎌田遺跡付近は、二上山東部から緩やかに派生した丘陵の末端部から熊谷川及び葛下川の形成する沖積低地の接点に位置するものと思われ、調査地周辺では、何層・何時期にもわたる暗灰色～暗青灰色系統の浸水した様相を示す粘質上層が一面に分布していることからみても、付近一帯は時期を変えて幾条もの自然流路が乱流、洪水を繰り返す、常に水の停滞した湖沼的・湿地的な環境であったことが推察される。

付近は現地形から、一見、二上山麓東部から派生するゆるやかな丘陵の末端部に位置するものと思われるが、これは、河川の氾濫等によって過去何時期にもわたって上流から押し流されてきた上砂の埋積された結果であり、本来の丘陵域はここまで伸びておらず、特に現在、周知の遺跡範囲として認識されている鎌田遺跡の東側付近一帯は、谷部、もしくは、低地部に相当することが推定される（それ故、地下遺構の埋没深度が深い）。

遺跡の正確な範囲や中心地等まだまだ不明確な点が多いのが現状であるが、今後の更なる発掘調査の進展によって遺跡の諸相が明らかになるものと思われる。

## 註 記

1) 香芝市教育委員会 1993「4. 鎌田遺跡」『平成4年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会

### 3 狐井遺跡（第8・9次）調査

#### I 遺跡の位置と環境

狐井遺跡は香芝市狐井の集落東方、通称狐井丘陵の南東一帯に広がる遺跡である。この遺跡は、昭和10年ごろ遺跡の北東に位置する改正池で縄文土器や石鏃などの採集された遺物が、翌年報告されその存在が知られるようになった。<sup>12</sup>その後、個人住宅建築や宅地造成に伴う発掘調査によって、縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡であることが判明した。しかし、遺跡の中心と考えられる明確な遺構は未だ確認できていない。

なお、周辺で縄文土器が出土している遺跡としては、瓦口森田遺跡（前期～晚期）や下田東遺跡（早期～晚期）がある。



図7 狐井遺跡調査地位置図

数字は調査次数を表す

#### 3-(1) 狐井遺跡第8次調査

#### I 調査の概要

##### 1 調査の経過と検出遺構

今回の発掘調査は宅地造成工事に先立って実施した。調査地は改正池の東約100mの地点で、かつて改正池の南東に接して存在した直径約100mほどの微高地の東端にあたるが、この微高地はJR和歌山線によって東西に分断され、削平されているため旧状をうかがい知ることはできない。

発掘調査は調査地のほぼ中央に4.4×5.7m×16mのトレンチを東西方向に設定し掘削を開始した。トレンチ西側は旧耕作土直下で地山となり、この面でピット3基と溝1条を検出した。ピットはいずれも約40cm四方の掘方で、深さは北から約30cm、16.8cm、13.6cmである。溝は幅約40cm、深さ6.7cmを測り、ピットから約40cmの位置でほぼ平行しているが両者の関係は不明である。

トレンチ東側は、このピットの時期に整地したと考えられる整地層から土器片やサヌカイト製石器などの遺物が全面に密集した状態で検出された。土器は縄文土器や土師器、瓦器などあり、埴輪片も出土した。また、サヌカイト製石器は石鏃とその未製品、石匙、石錐、石槍未製品などがある。そして、トレンチ東端では整地層の下層から幅約2mの黒灰色粘質土層が南北方向にあり、この層から縄文時代前期～中期初頭の土器が大量に出土した。また、土器に混じって獸骨（イノシシ・シカ）も出土した。この層を完掘したところ、下層から幅60～65cm、深さ40～50cmの溝が検出された。

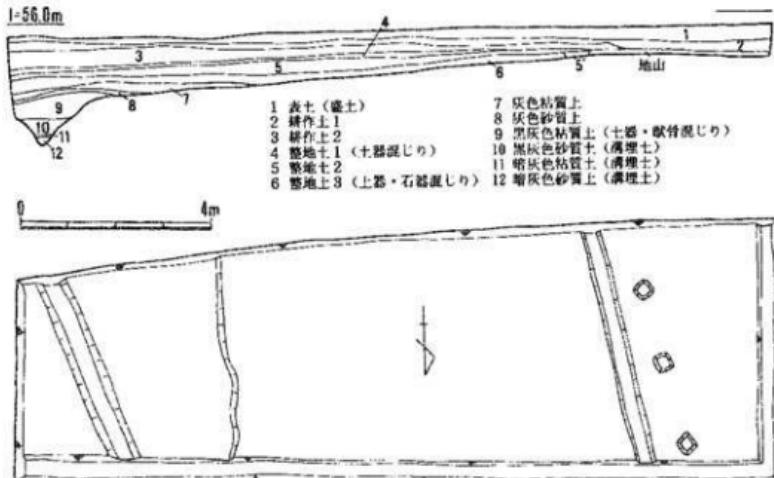


図8 狐井遺跡遺構平面・南壁土層断面図

しかし、溝の埋土から遺物は検出されなかった。

## 2 おもな縄文土器 (図9)

トレーナー東端の下層で検出した幅約2mの黒灰色粘質土層から3,000点あまりの縄文土器が出土した。文様の特徴から概ね北白川下層IIc式から大歳川式の時期にあたると考えられる。

1はかなり磨滅しているが、口縁部の破片で半截竹管の外側によるD字形爪形文を施し、内面は条痕調整が残る。1点のみ出土した。北白川下層Ia～Ib式に相当すると考えられる。

2～4は半截竹管内側によるC字形連続爪形文が施され、2には爪形文の下に縄文が施されている。内面は丁寧なナデ調整を施す。5・6はやや磨滅しているが半截竹管外側によるD字形爪形文が施されている。2～4は北白川下層IIa式、5・6は同IIb式に相当すると考えられる。

7～10は縄文地に突帯を貼り付け、突帶上に縄文を、口唇部には刻みを施す。7には補修孔がある。8の突帶はかなり細い。11～13も縄文地に突帯を貼り付け突帶上に縄文を施すが、口唇部に刻みはない。なお、13は4波頂の波状口縁と考えられ、波頂部に幅約3cmにわたって突帯を貼り付ける。いずれも内面は丁寧なナデ調整を施す。14～20は貼り付けた突帶上と口唇部に刻みを施すが、17・19の口唇部の刻みは貼り付けた突帶上に施されている。これら7～20と同じ特徴をもつ破片は100点あまり出土しており、北白川下層IIc式に相当すると考えられる。

21は口唇部に薄く粘土を貼り付けた上に縄文を施し、口端部外面も口端部から上下2段に突帯を貼り付けその上に縄文を施している。そして、その下部にさらに突帯を貼り付け半截竹管を用いてナデ引きする。なお、ナデ引きされた突帯の側縁には胎土のはみ出しがあり、内面には多数の爪痕



図9 織文土器1

が残る。22~27は貼り付けた突带上を半截竹管内側で押し引き、あるいはナデ引きしている。21と同じく押し引きされた突帶の側線には胎土のはみ出しがある。なお、22~25の口唇部は半截竹管を用いて刺突（押し引き）されている。28は円形に突帶を貼り付け半截竹管を用いてナデ引きしている。この21~28は北白川下層Ⅱc式~Ⅲ式に相当し、21・26・28は貼り付けられた突帶をナデ引きしていることからⅢ式に分類されるが、22~25は口唇部に突帶を貼り付けずに半截竹管を用いて直接刺突し、さらに、貼り付けられた突帶を押し引きすることからⅡc式に相当すると考えられる。

29・30は突帶を貼り付けた上に半截竹管を用いて押し引きされたΣ状刺突文を施す。そして、口縁部内面にはやや太めの突帶を貼り付けその上に幅約1cmの縄文を施す。口唇部がやや尖った形状

を呈する。31はまず、口縁部内面と口唇部に粘土を貼り付け、口縁部外面と口唇部に繩文を施す。そして、突帯を貼り付けた上に半截竹管を用いて押し引きされた爪形文を施す。32は口縁端部の内外面に細い突帯を貼り付け内外両側から刻みを施し口唇部を平らにしている。33は口縁端部の内外面にやや太めの突帯を貼り付け内外両側から刻みを施す。34は繩文地に突帯を貼り付け半截竹管を用いて押し引きされたΣ状刺突文を施す。35は外面に断面三角の突带上に半截竹管を用いて押し引きされたΣ状刺突文を施し、そして、口縁部内面にも突帯を貼り付け、その上に繩文を施した後に口縁端部の内外面に断面三角の突帯を貼り付けΣ状刺突文を施す。36は32と同じ技法で施文された口縁の破片である。37は底部の破片で端部に刻みを施す。これら29～37はその特徴から大歳山式に相当すると考えられる。

38～42はいずれも器面が白色に近く、38～41には外面に彩色が残る。当初から彩色を意図し、白色に焼き上がるよう製作したのであろう。なお、38・40は突帯を貼り付けた上に刻みを施す。39・41は突帯を貼り付けず、無文地に直接刺突を施す。42は半截竹管を用いたナデ引きによる平行沈線文が施文されている。43は浅鉢で、器高約14.0cm、口縁部径約26.0cm、底部径約16.5cmに復原される。42と同じく半截竹管を用いてナデ引きにより施文されており、一部に彩色が残る。口唇部に薄く粘土を、さらに、口縁付近にも細い突帯を貼り付けた後、いずれも刻みを施す。これら38～43は諸磯式の影響を受けた土器で、39・41～43は突帯がなく無文地に直接施文することからIIb式、38・40は突帯を貼り付けて施文することからIIc式に併行すると考えられる。

### 3 その他の繩文土器（図10）

1～8は諸磯系の土器と考えられ、1～6は平行沈線により施文されている。7・8は貼り付けられた突帯に刻みを施し、7には一部に彩色が残る。1～6は北白川下層IIb式、8・9は同IIc式に併行すると考えられる。9は平行沈線により施文されているが形式は不明である。10は貼り付けられた突帯に貝殻を押し付け施文されている。9・10は大歳山式に併行すると考えられる。

その他、内面に漆が付着する土器の底部、彩色のある特殊浅鉢形土器の破片、サスカイト製石器類としては石鎚が未製品を含め600点以上、石匙、石錐、異形石器、敲石などがある。なお、サスカイト片については数え切れていないが数万点以上はあろう。また、磨製石斧の破片が2点、磨石も数点出土している。

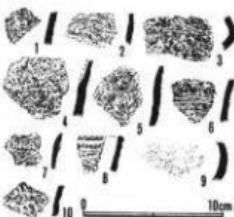


図10 繩文土器2

### II まとめ

今回の調査によって多大な成果が得られた。まず、近畿地方において資料が少ない繩文時代前期から中期初頭の土器が大量に出土したことである。今後、詳細な技法の検討によって北白川下層IIc式～大歳山式の変遷の一端が解明されるであろう。また、奈良県で初めて特殊浅鉢形土器の破片

やサヌカイト製石器などが大量に出土したことから、この遺跡が石器製作によって他地域と広く交流していた集落跡であったことが判明した。また、上層に混じって獸骨が出土したことも当時の食生活を考える上で貴重な発見である。なお、下層で検出された溝について、調査面積が狭かったためその性格を明らかにすることができなかった。しかし、今回の調査で遺跡の中心が調査地の西側に存在することが確実となり、今後の調査で遺跡の範囲等が明らかにされることを期待したい。

#### 註 稹

- 1) 橋口清之 1936「新発見の縄文式土器山上遺跡－人和下田村狐井遺跡－」『人和志』第3巻第11号
- 2) 小泉俊夫ほか 1980「神型文土器を出した香芝町下田東遺跡(一)」『青陵』第46号
- 3) 稲谷克彦 1982「北白川下層式土器、『縄文文化の研究』3 縄文土器 I ほか

### 3-(2) 狐井遺跡第9次調査

調査地：良福寺215番地の36

調査原因：東良福寺公民館建築（建替）

調査期間：平成5年6月21日

調査面積：10m<sup>2</sup>

#### I. 調査の概要

調査地は遺跡の中心地と推定される改正池の南約150mの地点で、宅地造成以前にこの改正池の南東に接して展開していたと思われる微高地の西側縁辺部に位置する。過去の宅地造成によって宅地化された旧微高地縁辺部では、局地的ではあるが個人住宅建築に伴う発掘調査を実施しており、一部で中世や古墳時代の包含層の存在が確認されている。

開発面積は約164m<sup>2</sup>と狭く、また、建物基礎の掘削深度も浅いことから、今回はとりあえず地下の基本層序の観察及び遺物包含層の有無確認を主眼として事業対象地北端に幅2m×長さ5mの東西方向の調査区を設定して調査を実施した。

調査区の基本層序は、①茶褐色砂質土層（層厚1m）（宅地造成に伴う盛土層）、②暗灰色砂質土層（層厚20cm）（旧耕作土）、③黄褐色砂質土層（層厚20cm）（旧耕作土床土）、④暗灰色砂層（層厚20cm）となる。

各層中の遺構や遺物は皆無であり、過去の宅地造成に伴う建物基礎は盛土の範囲内に収まることから、一連の記録保存の過程を経て当日中に発掘調査を終了した。

発掘調査の成果から推察すると、調査地付近は緩やかに落ち込んで行く微高地の西側縁辺部～谷部付近にあたり、北東方向に流れるかつての初田川の氾濫源であったことも考えられる。

## 4 尼寺廃寺跡第3次調査

### I 遺跡の位置と環境

尼寺廃寺跡は香芝市尼寺に所在する古代寺院跡である。尼寺の集落では、北は礎石が残る基壇状の高まりを中心とする地域と南は役行者をまつる薬師堂を中心とする地域の南北2箇所に古瓦が集中して散在していることが知られている。これらの瓦の分布域から一つの寺院跡とはとらえずに南北2つの寺院に分けて考えられており、それぞれ尼寺廃寺北・南遺跡と呼ばれている。

これまで香芝市教育委員会が主体となって北・南遺跡それぞれ1度発掘調査を行っており、第2次調査では飛鳥時代後半～室町時代にわたる多数の柱穴群（掘立柱建物）などが検出されている。

今回の調査地は、尼寺廃寺南遺跡の中心とされる薬師堂から東約80mにあたる地点である。

### II 調査の概要

#### (1) 調査の契機と経過

発掘調査は、共同住宅建築のため平成5年3月6日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。調査地は、第2次調査地と同一敷地内の東側にあたり、多数の遺構が検出される可能性があることから、第2次調査地の調査区に隣接して調査区を設定した。

第2次調査と同様に柱穴等の遺構を密に検出したため、第2次調査地の調査区と隣接して調査区の西側を可能な限り拡張した結果、多くの遺構や遺物を検出することができた。

調査は平成5年4月20日から同年6月6日まで実施し、調査総面積は241m<sup>2</sup>であった。

#### (2) 層序

調査区の基本層序は、現代耕作土・床土の第1・2層以下、地山の第7層黄褐色砂礫土層まで計7層に識別される。このうち水田造成に伴う整地土層と推定される第5層茶褐色砂質土層と第6層暗茶褐色砂質土層には奈良時代～中世の土器片や瓦片が包含されていたが、遺構は皆無であったため、付近一帯の基盤層である第7層の黄褐色粘質土層上面での遺構検出に努めた。

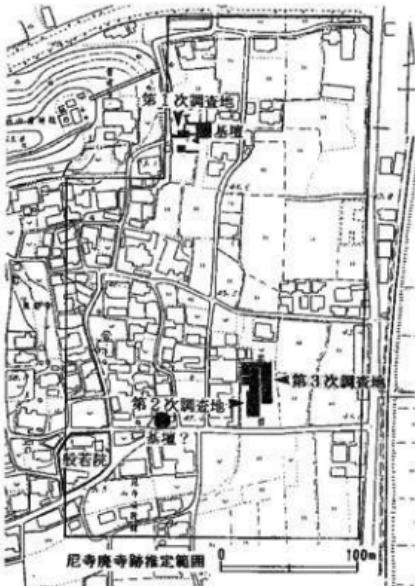


図11 尼寺廃寺跡調査地位図 (S=1/3,000)

### III 検出遺構

前回の第2次調査と同様、掘立柱建物跡に伴う多数の柱穴を始め、井戸2基、溝1条、素掘溝9条、土坑13基等を検出した。以下、検出遺構の概要について概観することとする。

#### 【SB-01】(図12、図版6-3・7-1)

南北2間、東西1間以上の東西方向に伸びる建物と思われるが全体規模は不明。柱間は桁行・梁行とも2.1(7尺)m等間で、柱穴の掘方は一辺60~80cmの整美な方形～長方形を呈し、深さ20~30cmを測る。当調査で検出した建物跡の中では最も古く、柱穴の規模も大きい。柱穴内の埋土からは混入品か否か不明であるが7世紀中頃の須恵器が出土している。

#### 【SB-02】(図12、図版6-3・7-1)

南北2間、東西10間以上の東西方向に伸びる建物。柱間は桁行2.1m(7尺)、梁行2.1m(7尺)で桁行検出総長は20.4mを測る。柱穴の掘方は円形～梢円形を呈し、直径35~60cm、深さ20~40cmで掘方内には平瓦を転用した根石が敷かれたものがみられる。柱間は、大半は7尺等間であるが、東から5間めが1.8m(6尺)、これを介して東西4+6間めが2.4m(8尺)となることから回廊の存在が推定される。東西に亘る建物配置の規則性から回廊状建物の可能性が高く、回廊の中でも複数と考えられる。柱穴掘方内埋土には上述した奈良時代の土器や瓦片とともに炭粒が混入しており、他の奈良時代の柱穴に比して掘方の規模が小さいことから前述建物の焼失後に再建された建物跡と推定される。柱穴掘方内には飛鳥時代～奈良時代の上器片が含まれているために建物の確実な建立時期は判然としないが、上限を示す上器片から10世紀初頭以降と考えられる。

#### 【SB-03】(図12、図版6-3・7-2)

南北3間、東西2間の南北棟の建物跡。柱間は桁行2.5m、梁行2.1m、柱穴の掘方は円形を呈し、直径約10~20cm、深さ20cmを測る。SE-01を切り込むことから9世紀以降と考えられる。

#### 【SK-10】(図12、図版6-3)

幅1m、深さ10cmを測る不整形な落ち込み状遺構。平安時代前半の皿1点が出土した。

#### 【SK-12】(図12、図版6-3)

検出幅1m、深さ40cmを測る不整形な落ち込み状遺構。11世紀中頃の羽釜1点のほか奈良～平安時代の平瓦や丸瓦數十点が出土した。

#### 【SX-11】(図12、図版6-3・7-2)

幅1.8~2.5m、深さ10cmの不整形な浅い落ち込み状遺構。製塙土器の破片等が出土した。

#### 【SX-12】(図12、図版6-3・7-2)

幅0.8~3.5m、深さ10cmの不整形な浅い落ち込み状遺構。製塙土器の破片等が出土した。

#### 【SD-01】(図12、図版6-3・7-2)

調査区を東西方向に延びる溝跡。幅1.5m、深さ25cmを測る。第2次調査で検出したSD-01に続く溝跡で、遺物は出土しなかったが、第2次調査の出土遺物から14世紀と考えられる。

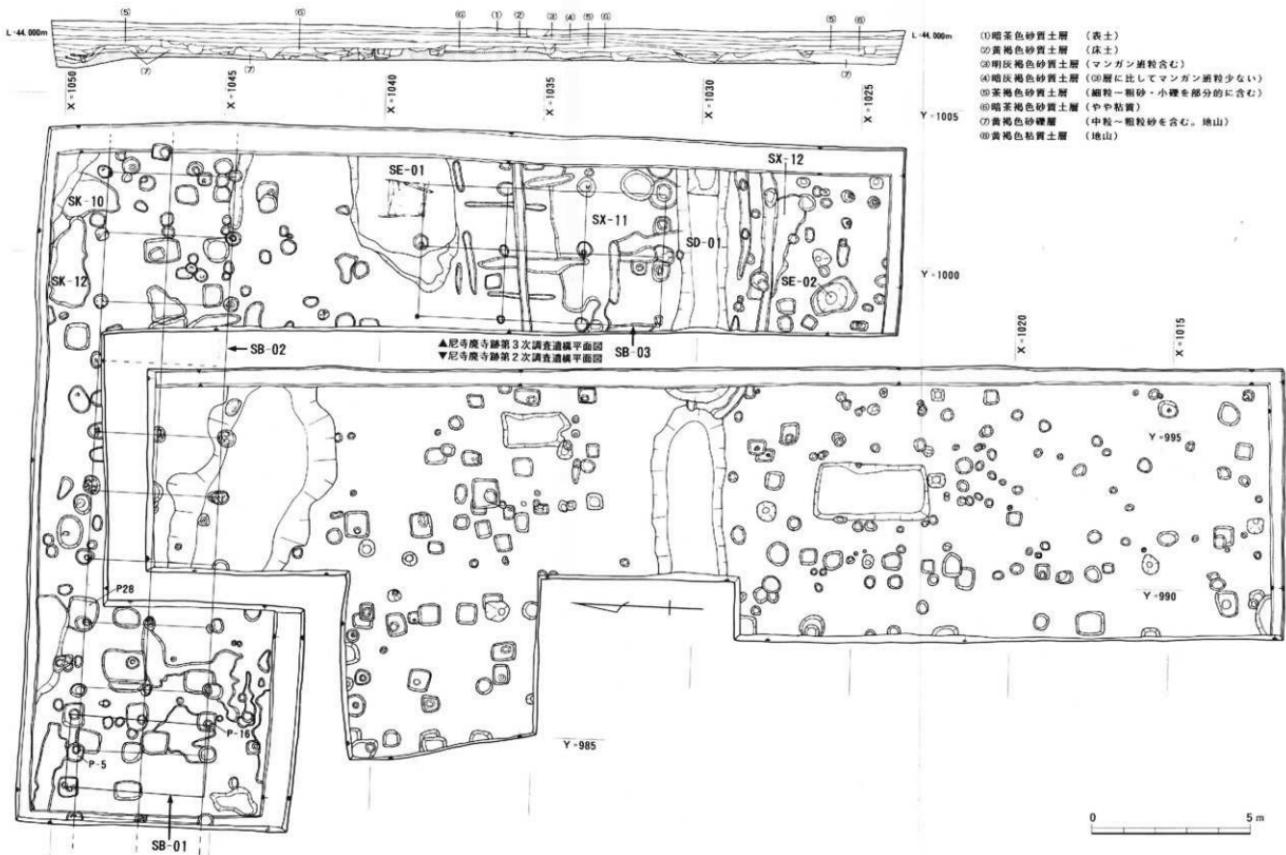


図12 尼寺廃寺跡第3次調査遺構平面・断面図 (S=1/125)

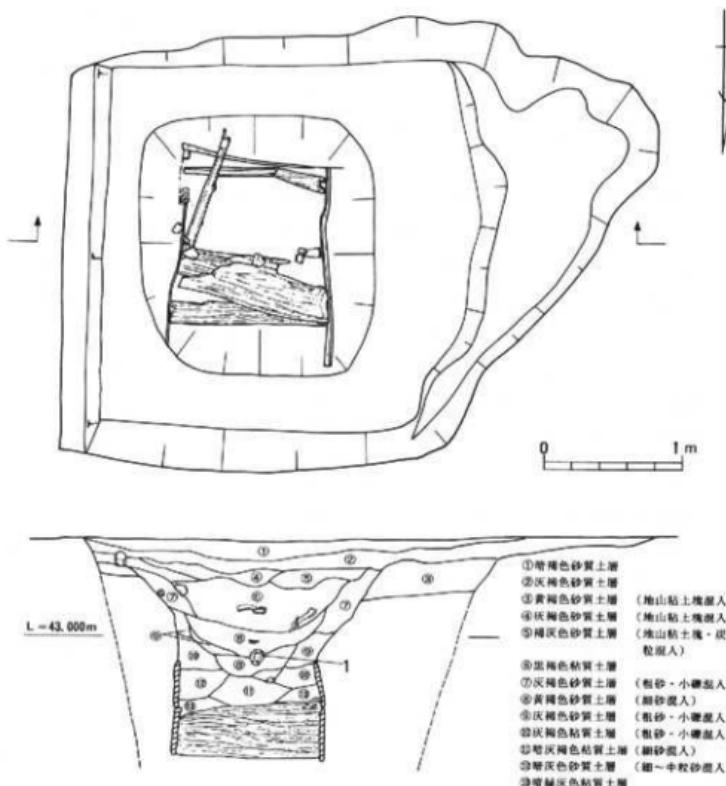


図13 SE-01平面・土層堆積状況図 (S=1/40)

【SE-01】(図12・13、図版6-3・7-3・8-1～3)

掘り方一辺約2.6m、井戸枠は一辺約1.2mの横板3段井籠組の井戸で、最深部は遺構検出面から2.6mを測る。底部には集水用の曲物容器が1基安置されていた。特に、井戸枠内からは約8点の墨書き器の破片を始め、焼痕跡のある凝灰岩製基壇化粧石1点、壺串1点等が出土した。井戸枠内埋積土上層出土土器から廃絶年代は8世紀末～9世紀初頭と考えられる。

【SE-02】(図12、図版6-3・9-3)

掘り方約95cm×115cm、深さは遺構検出面から2.6mを測る。井戸枠は遺存せず、素掘の井戸と考えられる。埋土は暗褐色粘質土層の単一層で、井戸の底から壺串1点が、埋土上層からは、12世紀初頭の瓦器碗が数点出土した。

#### IV 出土遺物

各造構や包含層中からは飛鳥時代～室町時代にかけての多くの遺物が出土している。以下、出土遺物のうち図示可能な遺物について造構別に概観することとする。

##### (1) SE-01出土遺物

###### 【井戸枠内出土遺物】(図14、図版10)

1は灰釉陶器長頸壺である。口徑5.3cm、器高13.0cm、胴部径9.2cm、高台径5.2cmを測る完形品である。体部はやや肩の張った球形を呈し、底部には高台がつけられる。体部内外面ともロクロナデ、口縁部はロクロナデにより強く外反する。色調は灰褐色する精良品で、体部外面には釉がかかり、狼投山古窯の製品と思われる。口縁部に栓状のものは装着されていなかったが、体部内面には漆が付着していることから漆容器として使用されていたものと考えられる。

2はミニチュアの土師器壺である。手づくね成形によるもので、底部は焼成前の穿孔により、内外面が貫通している。口徑6.6cm、器高3.0cmを測る。口縁部内面はヨコナデ。とくに口縁部外面には成形時の指頭圧痕を明晰に残す。

3は土師器皿Aである。口縁部は外反し、口縁端部は内側に丸く肥厚する。復元口徑22.0cm、器高2.3cmを測る。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部外面にはヘラケズリが施される。

4は須恵器環Bである。口縁部はわずかに外反する。復元口徑13.4cm、器高4.4cmを測る。

5は土師器壺Aである。胴部の張りは弱く口縁部は「く」の字状に外反する。復元口徑18.4cm、器高(残存値)9.0cmを測る。口縁部内外面ともヨコナデ調製。体部にはハケ調製が施される。

6～14は製塙土器の口縁部の破片である。口縁部の形態は、成形時の口縁部下位の強いヨコナデにより口縁部が丸く内側に肥厚するもの(6～8)と口縁部がややとがり気味に仕上げられるもの(9～11)がある。いずれも色調は赤褐色系統の色調を呈し、胎土に粗粒の砂粒を多く含み、焼成は脆い。内面には成形時の指頭圧痕を残し、外面には粘土紐接合痕をとどめるものが多い。

15は曲物容器の底部である。底板と側板が分解・欠失しているため、復元是不可能であるが、底板を薄い板目材の側板の内側にはめ込み、側板の上から木釘(竹釘)を打ち込んで接合する木釘結合による曲物である。底板の直径22cm、厚さ1.0cmを測る。樹種は広葉樹の桧材である。

16は斎中である。桧材の征目薄板を上端を半頭状、下端を剣先状に作り、上端近くの両側面の1カ所上下に切り込みを施すもので、長さ24.1cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmを測る。

17は凝灰岩製の切石である。長辺20.9cm、短辺18.6cmを測り、方形に加工されている。表面と側面一方には煤が付着しており、焼痕跡が認められる。寺院に伴う墓地の化粧石ないしは地覆石と推定される。牡丹洞地域に分布する凝灰岩の岩相に類似する。

このうち、井戸枠上部が抜き取られた後の井戸の最終埋没層である上層(⑥～⑧層)からは1～3が、井戸枠内底面からは15～17が出土しており、6～14を含めた製塙土器は井戸枠内各埋土層中から散在的に出土している。

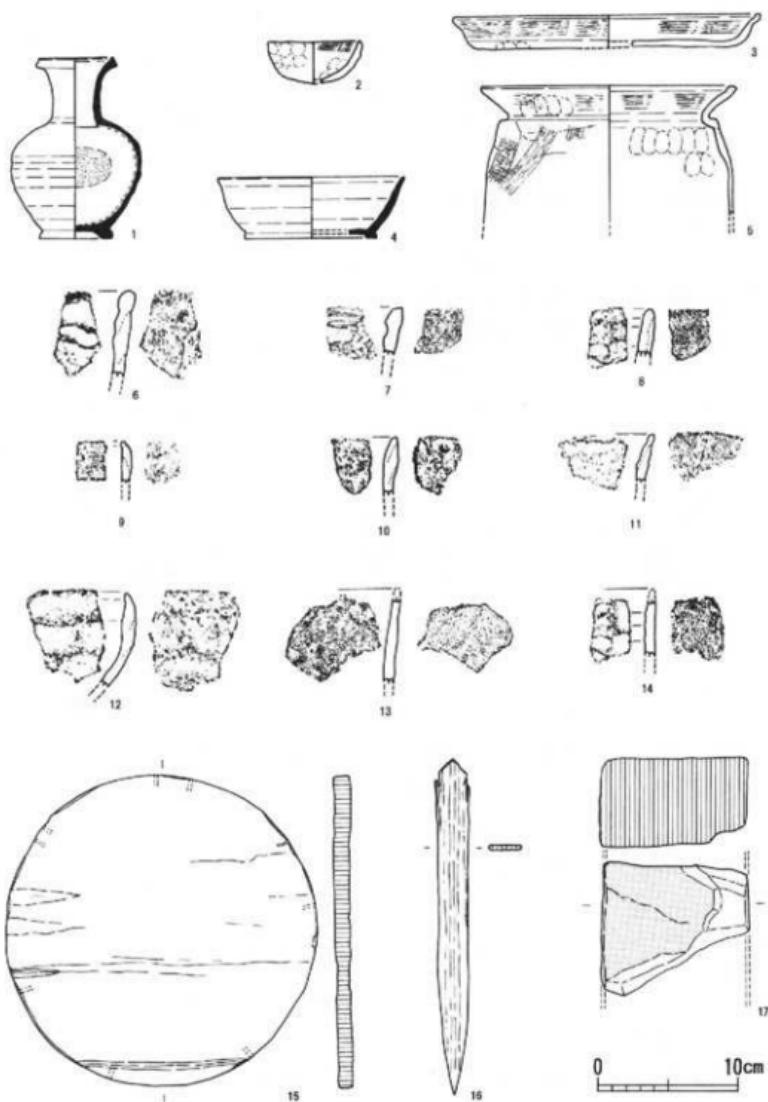


図14 SE-01井戸枠内出土遺物実測図 (S=1/4)

【井戸枠内出土墨書き器】(図15、図版11)

井戸枠内の下層～中層からは計8点の墨書き土器が出土している。墨書き土器の器種の内訳は、須恵器1点以外はすべて土師器であり、いずれも完形に復元し得るものはない。

- 18は土師器皿？である。底部外面に「右」？か「太」？が記されている。
- 19は土師器皿？である。底部外面に「枝」？が記されている。
- 20は土師器皿？である。底部外面に「十」？か「廿」？が記されている。
- 21は土師器皿？である。底部外面に「稔」？が記されている。
- 22は土師器皿？である。底部外面中央部に「稔」が記されている。
- 23は須恵器壺Bである。底部外面の高台付近に「方」？が記されている。
- 24は土師器碗Cである。器高3.1cmを測る。口縁部外面に「月」？が記されている。
- 25は土師器皿？である。底部外面中央部に「中」と右上に記号の一種と思われる「ノ」が記されている。

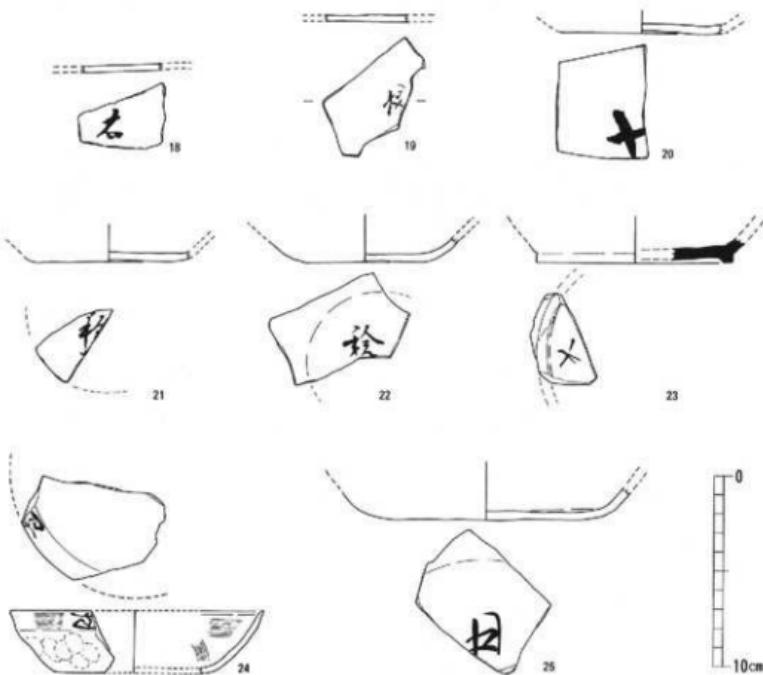


図15 S E-01 井戸枠内出土墨書き土器実測図 (S=1/3)

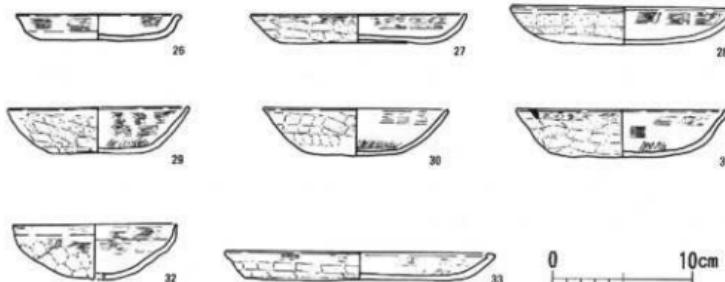


図16 SE-01 井戸枠外上層出土土器実測図 (S=1/4)

【井戸枠外上層出土土器】(図16、図版12)

井戸廃絶時の井戸枠抜き取りに伴う井戸枠外上層（第③層）からは以下の土器が出土している。

26は土師器皿Cである。口径11.8cm、器高1.8cmを測る。口縁部は緩やかに外反する。口縁部内面はヨコナデ、口縁部から底部外面にはヘラケズリが施される。

27は土師器皿Aである。口径15.4cm、器高2.1cmを測る。口縁部内面はヨコナデ、口縁部から底部外面にはヘラケズリが施される。

28は土師器皿Aである。口径16.2cm、器高2.7cmを測る。口縁部内面はヨコナデ、口縁部から底部外面にはヘラケズリが施される。

29は土師器椀Aである。口径15.2cm、器高3.4cmを測る。口縁部内面はヨコナデ、口縁部から底部外面にはヘラケズリが施される。

30は土師器椀Aである。口径12.9cm、器高3.2cmを測る。口縁端部は内側に丸く肥厚する。口縁部内面はヨコナデ、口縁部から底部外面にはヘラケズリが施される。

31は土師器椀Aである。口径13.2cm、器高3.5cmを測る。口縁部内面はヨコナデ、口縁部にはヘラケズリが施される。

32は土師器椀Aである。復元口径11.6cm、器高4.0cmを測る。口縁端部は上方へつまみ上げられ底部外面に成形時の指頑圧痕を残す。

33は皿Aである。口径16.2cm、器高2.7cmを測る。口縁端部は内側へ肥厚する。口縁部内面はヨコナデ、底部外面にはヘラケズリが施される。

井戸枠内の出土遺物に比して井戸枠の据え付けに伴う井戸枠外の掘方からは帰属時期の明確な土器は出土していないため、井戸の掘削・使用開始時期は断定できないが、井戸枠外の掘方から出土した土器の破片から掘削時期は8世紀後半と考えられる。また、上述した井戸枠内（第⑥～⑩層）や井戸枠外上層（第③層）出土土器から井戸の廃絶時期は8世紀末～9世紀初頭と推定され、8世紀後半～8世紀末にかけて比較的短期間に使用・遺棄されたものと考えられる。

## (2) 柱穴内出土土器 (図17)

34はSB-02 (P-5) から出土した施釉陶器の底部の破片である。高台径6.7cmを測る。

35は柱穴 (P-28) から出土した土器器皿Aである。復元口径13.8cm、器高2.6cmを測る。褐色を呈する精製品である。口縁部内面はヨコナデ。底部内面には放射状暗文が施される。

36はSB-01 (P-16) から出土した須恵器皿Gである。復元口径8.8cm、器高3.0cmを測る。口縁部内外面はロクロナデ、底部外面にはヘラケズリが施される。飛鳥II期に比定される。

## (3) SX-11出土土器 (図17、図版12)

37~40は製塙上器の破片である。37~39は同じ縁部破片。40は同底部である。いずれも褐色系統の色調を呈し、胎土に粗粒の砂粒を含む。37~39の内面には成形時の指頭圧痕を残す。

41は須恵器皿H蓋である。復元口径9.6cm、器高3.1cmを測る。飛鳥II期に比定される。

42は須恵器皿Hである。復元口径8.8cm、器高2.7cmを測る。飛鳥II期に比定される。

## (4) SX-12出土土器 (図17)

43は須恵器皿H蓋である。復元口径10.0cm、器高2.7cmを測る。

44は須恵器皿Hである。復元口径8.4cm、体部径10.0cm、器高2.6cmを測る。

45・46は須恵器皿Hである。45は復元口径8.3cm、体部径10.5cm、器高2.6cmを測り、46は復元口径10.4cm、体部径12.4cm、器高3.1cmを測り、天井部はヘラケズリ後木調整である。

47は土器器皿Cである。復元口径15.8cm、器高4.4cmを測る。褐色を呈する精製品である。底部内面には放射状の暗文が施される。43~47いずれも飛鳥II期に比定される。

## (5) SK-10出土土器 (図17)

53は土器器皿である。復元口径13.8cm、器高2.3cmを測る。口縁部上端を強いヨコナデにより、外反させる。底部外面には成形時の指頭圧痕がみられる。10世紀中頃~11世紀と推定される。

## (6) SK-12出土土器 (図17、図版12)

52は羽釜である。口縁部の幅を広く外反成形した広口A型の土釜で菅原編年人和B1型、松本編年A-I型にあたる。胴部の張りや幅に対して口部の幅を比較的狭く成形したタイプで、「く」の字形に外反する口縁部を有し、口縁端部は内側に厚く肥厚させて角張る。口縁部下の胴部上方には幅1cmの鈎がめぐらされており、復元口径21.4cm、器高(残存値)7.5cm、鈎の復元口径は27.0cmを測る。口縁部と体部には成形時の指頭圧痕を残す。11世紀と考えられる。

## (7) SE-02出土土器 (図17、図版12)

48~50は瓦器碗である。48は口径15.4cm、器高6.3cm、見込高5.4cm、高台径6.4cmを測り、49は口径15.7cm、器高6.0cm、見込高5.2cm、高台径7.5cmを測る。50は口径16.0cm、器高5.8cm、見込高4.9cm、高台径7.2cmを測る。いずれも見込部には平行線状の暗文が施され、底部外面には成形時の粘土上の押しのぼし痕を残す。全体的にミガキは粗く、48~50の口縁部外面下半部ではミガキ調整が省略される。口縁部はやや外反しており、口縁端部は沈線により段をもつ。高台は外傾状に張り付け

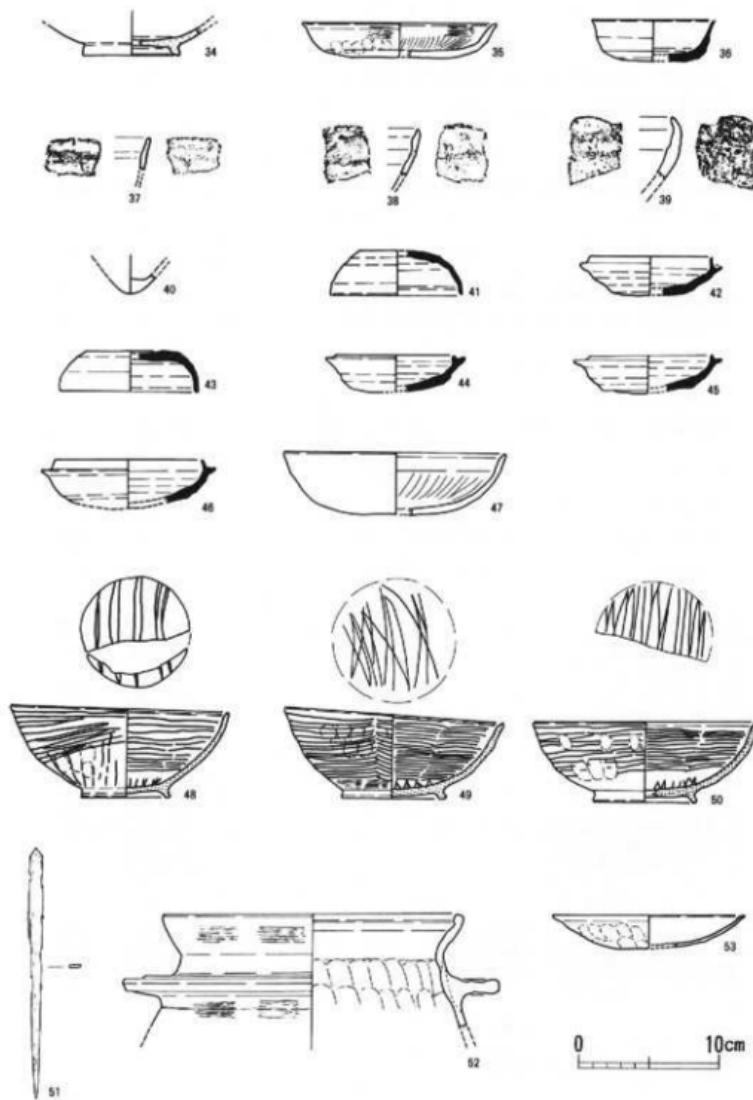


図17 柱穴内、SX-11+12、SK-10+12、SE-02出土遺物実測図・拓影 ( $S=1/4$ )

たもので、川越編年 I - D 型式、近江編年 I - 3 期、12世紀初頭に比定される。

51は斎串である。長さ17.8cm、幅0.9cm、厚さ0.2cmを測る。上端を圭頭状にして、下端を劍先状に作ったもので、両側面の左右対称位置の計4カ所に三角形の切り欠きが施される。

#### (8) 調査区東側溝出土瓦 (図18、図版12)

54は均整唐草紋軒平瓦である。外区は浅く、内区には繊細な線で唐草紋が表現されているが、両端では左右非対称な箇所が見られる。平瓦部凸面の瓦当沿いに明確な顎面をもつ曲線顎II式に比定されるもので、顎面の幅は3cmと広く、ヨコナデ調整により平瓦部にかけて強く屈曲している。凸面のほぼ全体にのタテ方向の縄叩きが施され、凹面には布目が残る。青灰色の須恵質を呈し、全長34.4cm、広端幅18cm、狭端幅16.5cmを測る。加守庵寺(当麻町)で同范の瓦がみられる。

調査区東側側溝内で検出した幅80cm、深さ40cmの柱穴状の遺構底部から出土しており、柱の根石として転用されていたものと考えられる。

#### (9) SE-02出土瓦 (図19)

55は平瓦である。軟質で灰黒色を呈し、全長38cm、広端幅28.5cm、狭端幅27cmを測る。凸面は縦位の縄叩きを施し、その後の調整はみられない。凹面は、四辺の内側を薄くヘラケズリしている。

56は丸瓦である。軟質で灰色を呈し、胴部長38cm、胴部広端24.5幅cm、胴部狭端幅は16.5cmを測る。凸面はタテの縄叩きののち、胴部にタテ方向のナデ調整が施される。凹面は、広端と胴部両側縁の内側を面取りする。これらの瓦類は井戸の廃絶時期を示す最上層から出土している。

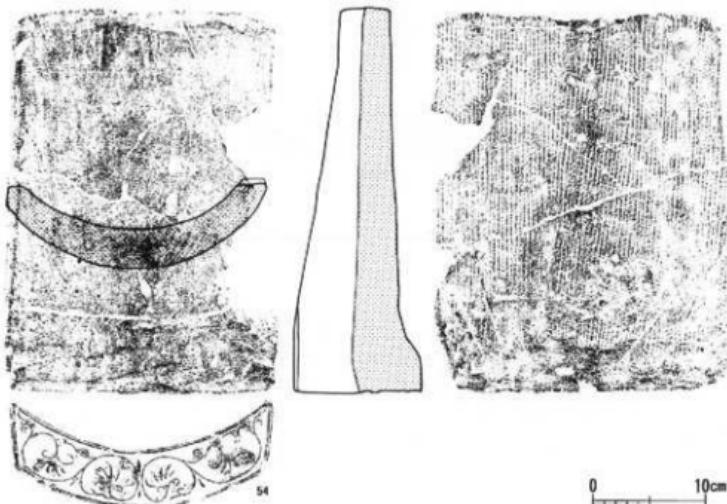
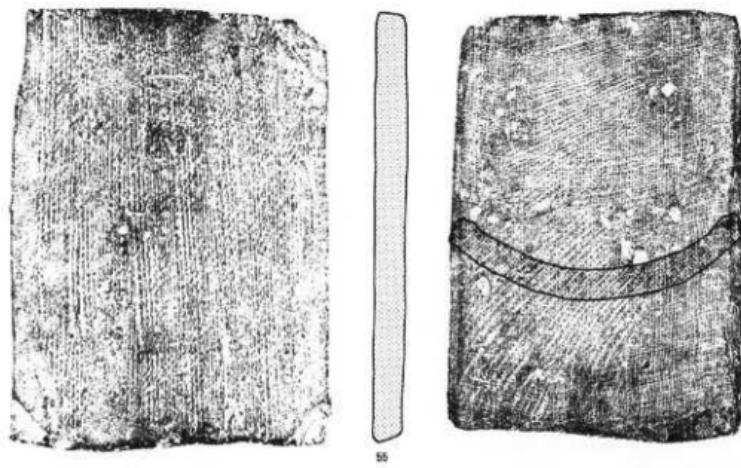
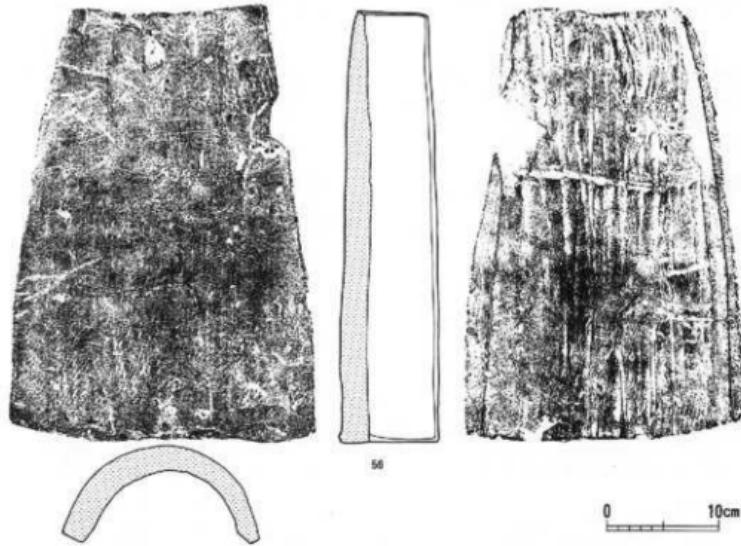


図18 調査区東側側溝出土軒平瓦実測図・拓影 (S=1/5)



55



56

0 10cm

図19 SE-02出土軒平・軒丸瓦実測図・拓影 (S=1/5)

## V まとめ

第2次調査と同様、掘立柱建物跡に伴う多数の柱穴等の遺構を検出することができた。遺構・遺物の存続時期は、飛鳥・奈良・平安・鎌倉・室町時代の大別して4時期に分けられる。大半は平安時代～室町時代を中心とする古代末～中世にかけて形成された掘立柱建物跡やそれに伴う遺構であるが、最も古い時期のものとしては、7世紀代にさかのぼる可能性がある掘立柱建物跡SB-01やSX-11・12がある。隣接する第2次調査区では7世紀中頃にまでさかのぼる可能性がある。

奈良時代の遺物は包含層や平安時代～室町時代の遺構から最も多く出土しているにもかかわらず数十基の柱穴や土坑以外は奈良時代の遺構は少ない。柱穴についても当調査地では建物跡として並ぶものはないが、奈良時代末の掘削・廃絶年代が考えられるSE-01からは、尼寺廃寺跡はじめ墨書き器が出土した。いずれも古洋句的な意味合いを示すものや場所を示すもので寺院名や機関を特定できるものはないが、今後、遺跡の性格を考えて行く上で極めて重要な資料である。

平安時代と考えられるSB-02については圓窓状の建物跡の可能性が考えられる。柱穴の掘方は奈良時代の柱穴に比して小規模なものが多く、また、柱穴掘方の埋土層中には炭粒が混入しており、根石として転用された瓦等の奈良時代の上器や瓦が含まれていることから、これらの建物跡は飛鳥時代～奈良時代に建立された前身建物の焼失に伴う再建建物跡と考えられる。

以上の通り、とくに、10世紀以降のSB-02などの組織的な建物配置をはじめ、多数の製塙土器や墨書き器、灰釉陶器や緑釉陶器等の数点の施彩陶器の存在は、一般的な集落跡と解するよりもむしろ、僧坊跡等の何らかの寺院にかかる施設跡である可能性が強い。

遺構や遺物の分布密度から考えると、当調査地に比して隣地の第2次調査地の方が7～8世紀代の遺構や遺物が多いことや掘立柱建物に伴う柱穴の分布密度が高く、また、柱穴掘方の規模も大きいことから平安時代の後進建物を始め、飛鳥時代～奈良時代の前進建物の中心地は第3次調査地の西方に求められ、今後、基壇状の構築物付近を中心とした箇所での発掘調査の進展が望まれる。

### 註 索

- 1) 保井芳太郎 1932『大和上代寺院志』大和史学会
- 2) 香芝市教育委員会編 1993『尼寺廃寺南遺跡発掘調査概報』香芝市教育委員会
- 3) 土器の型式名等については奈良国立文化財研究所発行の刊行物による。
- 4) 菅原正明 1983『畿内における土器の製作と流通』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 5) 松本 洋 1988『十六面・薬王寺遺跡』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第54冊』奈良県立根原考古学研究所
- 6) 川越俊一 1983『大和型瓦器統をめぐる二、三の問題』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 7) 近江俊秀 1991『大和型瓦器統の編年と年代の再検討』『古代文化』第43巻10号

## 5 藤ノ木丁遺跡〔第6～11次〕の調査

### I 遺跡の位置と環境

藤ノ木丁遺跡は香芝市の中南部、香芝市磯壁から狐井にかけて広がる古墳時代を中心とする遺跡である。

遺跡は、二上山麓東部から緩やかに派生する二上扇状地の先端部から大和川の一支流である葛下川沿いに形成された沖積低地上を中心に展開しており、昭和63年度の第1次調査で古墳時代中期から後期にわたる数条の流路とともに大量の遺物が出土したことからその存在が明らかとなった。

当遺跡は、市内遺跡の中でも最も開発が盛んな地域であり、これまで5次の発掘調査を実施しているが、第1次調査以外は顕著な遺構や遺物は検出されておらず、遺跡の正確な範囲等遺跡の詳細についてはまだ不明なところが多いのが現状である。

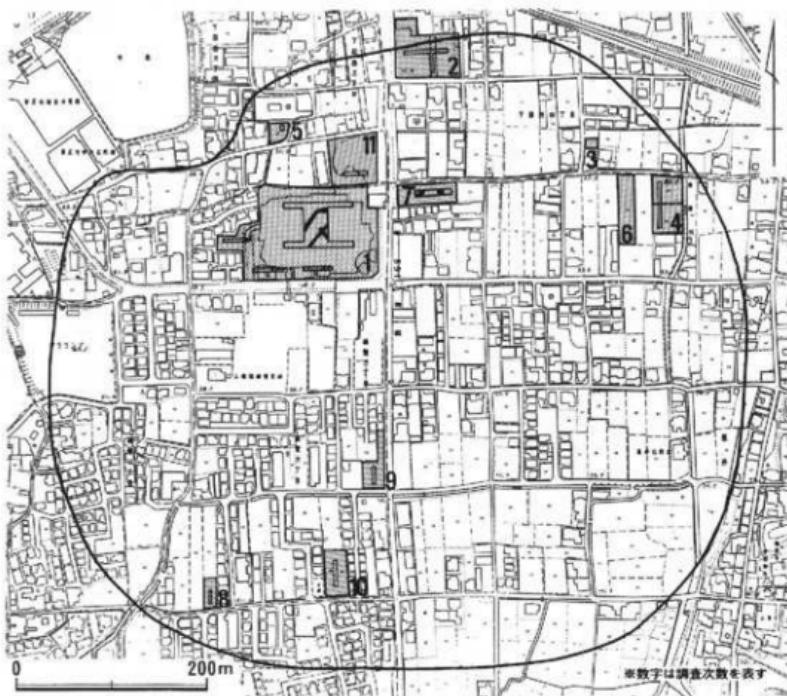


図20 藤ノ木丁遺跡調査地位置図 ( $S=1/6,000$ )

## 5-(1) 藤ノ木丁遺跡第6次調査

調査地：狐井186-1

調査原因：共同住宅建築

調査期間：平成5年4月20日～4月21日

調査面積：70m<sup>2</sup>

発掘届出：平成5年3月6日

### I 調査の概要

遺跡の東側での調査は皆無であったため、遺構の有無や遺物の分布状況等は不明であったが、建物基礎埋設に伴う地下遺構へ与える影響が懸念されたため、事業者側と協議のうえ、発掘調査を実施することとなった。

調査は、地下の基本層序の把握及び遺跡の東側の様相を把握するため、建物基礎埋設箇所である事業対称地域の中央部に幅1m、長さ50mの南北方向の調査区を設定して試掘調査を実施した。

調査区の基本層序は以下のとおりである。

第1層 茶褐色砂質土層 〔層厚10cm〕(盛土)

第2層 暗灰色砂質土層 〔層厚10cm〕(旧耕作土・やや粘質)

第3層 黄褐色粘質土層 〔層厚30cm〕(旧耕作土・土)

第4層 灰褐色粘質土層 〔層厚35cm〕(やや粘質・層上面にマンガン斑点含む)

第5層 灰褐色砂質土層 〔層厚35cm〕(やや粘質)

第6層 明灰褐色粘質土層 (地山)

水田造成に伴う整地土層である第4層～5層中からサスカイト製石器の剥片数点と時期不明の上彫器の細片数点が出土した以外は遺構は皆無であり、写真及び平面・断面図作成等の一連の記録保存の過程を経て、当日中に試掘調査を終了した。

調査の結果、遺構や遺物等は皆無であったことから、当該地は周知の遺跡範囲の東端に相当することが確認することができた。従って、周知の遺跡範囲はより西方へ狭まる可能性がある。

## 5-(2) 藤ノ木丁遺跡第7次調査

### I 調査の概要

#### (1) 調査の契機と経過

調査は、共同住宅建築のため、平成5年6月17日付けで事業者から発掘届出書が提出されたことに起因する。香芝市教育委員会では、事業対象地が古墳時代の流路や土器が検出された昭和63年度の第1次調査地に近接しており、また、建物基礎埋設に伴う地下造構への影響が危惧されたため、事業者側と協議のうえ、発掘調査を実施することになった。

現地調査は、建物基礎埋設箇所である開発区域中央部に南北幅5m、東西長さ40mの調査区を設定して発掘調査を実施した。

調査の結果、調査区西端で古墳時代の流路跡1条を、そして、調査区東端で弥生時代後期の遺物包含層と落ち込み状造構を数基検出した。

調査は平成5年8月17日～同年9月16日まで実質15日間に亘って実施し、調査面積は200m<sup>2</sup>であった。

#### (2) 番序 (国版13-2)

調査区の西側と東側では上層の堆積状況は若干異なるが、おおむね、地トの基本番序は以下のとおりである。

第1層	黄褐色砂質土層	[層厚130cm] (客土)
第2層	暗灰色粘質土層	[層厚15cm] (旧耕作土)
第3層	黄褐色粘砂層	[層厚10cm] (旧耕作土床上、やや粘質)
第4層	灰褐色微～細砂層	[層厚10cm]
第5層	灰褐色砂質土層	[層厚15cm] (整地土層)
第6層	灰色砂礫層	[層厚20cm] (砂礫層。調査区の中央部から西側のみ分布)
第7層	黒褐色砂質土層	[層厚20cm] (弥生時代の遺物包含層)
第8層	黄褐色砂質土層	(地山)

調査区西側では河道の氾濫に伴う洪水砂層と推定される第6層〔灰色砂礫層〕が厚く堆積しており、調査区西側から中央部に向かうにつれて次第に薄くなって行く。一方、調査区中央部から東側にかけて第8層〔黄褐色砂質土層〕の地山直上には弥生時代の遺物を包含する第7層〔黒褐色砂質土層〕が薄く介在しており、東側にかけて層厚を増して行く傾向がある。

調査区西側では第8層を切り込む古墳時代の流路跡1条を、かわって、調査区東側では第7層上面から弥生時代の落ち込み状造構と遺物を検出した。

調査は、弥生時代後期の遺物を包含する第7層上面での遺構検出と遺物採集を主眼として調査を実施した。

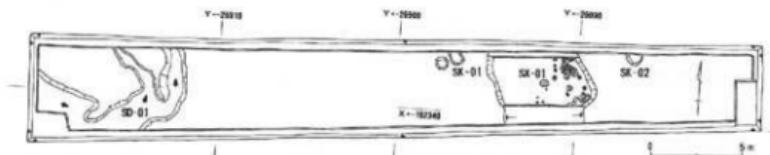


図21 藤ノ木丁遺跡第7次調査遺構平面図 ( $S=1/300$ )

## II 検出遺構

調査区西側で南西から北東方向に流れる古墳時代の流路跡1条と調査区東側で弥生時代の不整形な落ち込み状遺構3基を検出した。以下、検出遺構の概要について簡略に記す。

### 【SD-0 1】(図21、図版13-1)

調査区西から南東方向へ流れる浅い自然流路跡。検出幅2m、最深部の深さは0.9mを測る。堆積土は、上から灰色砂礫層、黒褐色砂礫層、灰色シルト層、灰色粘土層となる。流路の最終埋没層である灰色砂礫層から布留式壺や小形丸底壺、高坏等が出土した。出土土器より古墳時代中期のものと考えられる。

### 【SK-0 1】(図22)

径70cm、深さ8cmの円形の浅い落ち込み状遺構。堆積土は黒褐色砂質土層(やや粘質、微砂混じり)の単一土層で、埋土中から甕や鉢の底部など弥生時代後期後半の土器片数点が出土した。

### 【SK-0 2】(図22)

径80cm、深さ12cmの梢円形の浅い落ち込み状遺構。堆積土は黒褐色砂質土層とやや粘質混じりの黒褐色砂質土層の2層で、土坑底から甕や短頸壺など弥生時代後期後半の土器片が出土した。

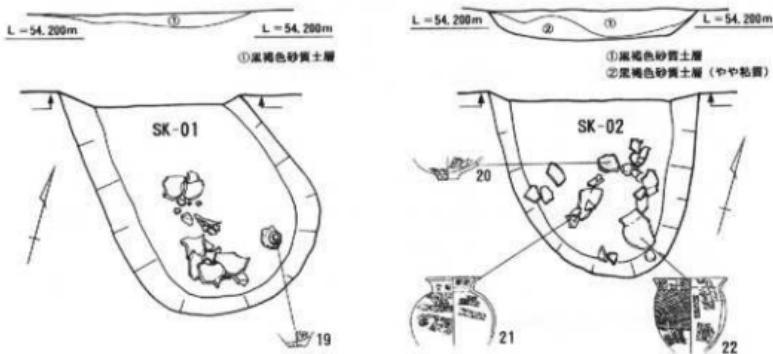


図22 SK-01・02遺物出土状況図・土層断面図 ( $S=1/20$ )

【SX-01】(図23) (国版13-3・14-1~3)

東西最大幅5.5m、南北検出長3.2m、中央の最深部の深さ20cmの浅い不整形な落ち込み状遺構。遺構中央部から炭粒が充満した直径45cm、深さ10cmのピット1基を検出した。堆積土は黒褐色砂質土層(やや粘質)の單一土層で、とくに遺構の東側では埋土中には部分的に炭粒が含まれる。

遺構の西側は遺物は皆無であったが、東側には数点の炭化材とともに坑底より約20cm浮いた状態で甕や鉢、有孔鉢、壺、高环、手焙形土器(腹部)など弥生時代後期後半の土器が集中して出土した。完形品に近い状態の土器はあるものの、完形品ではなく、いずれも破片が大半で、個体数的には甕の占める割合が最も多い。

遺構の性格としては中央部にピット状に炭の集積がみられることから、調査当初は住居跡とも考えられたが、不整形で柱穴も検出されなかったことからその可能性は低いものと考えている。

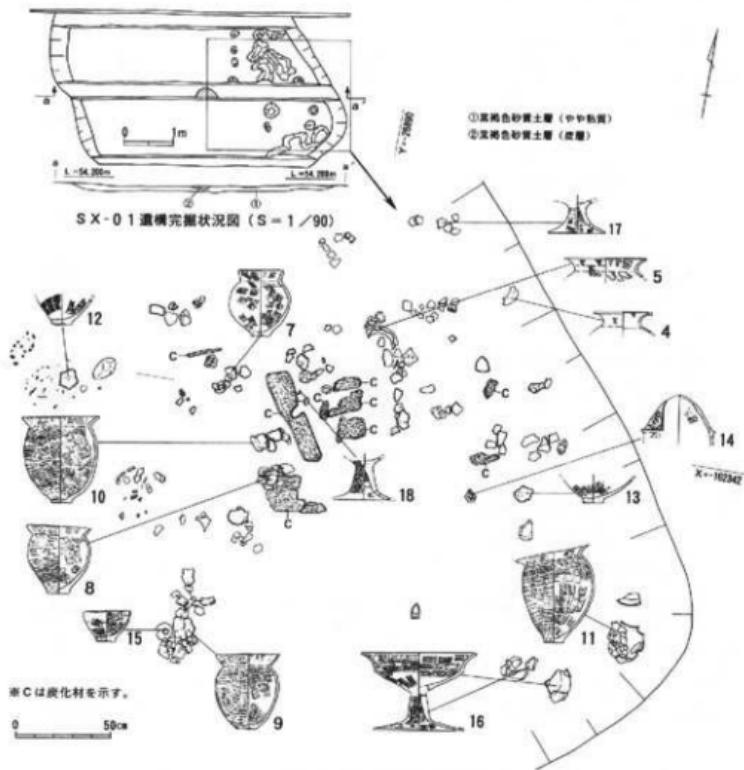


図23 SX-01 遺構平面図・遺物出土状況図 ( $S = 1/30$ )

### III 出土遺物

SD-01からは古墳時代前期の土器が、弥生時代の遺物包含層やSX-01~03からは多くの弥生時代後期の弥生土器が出土しており、このうち、図示可能な遺物のみ掲載することとする。

#### (1) SD-01 (図24、図版17)

1は小形丸底壺である。体部高が口縁部高を凌駕する。褐色を呈する精製品で体部にはヘラ磨きが施される。

2は高環の脚部である。胸部は中空で脚部と裾部との境は明瞭である。

3は布留式壺である。口縁部は内湾気味に立ちあがり、端部は丸く仕上げている。体部は球形を呈し体部中位～底部外面には縦位のハケが施される。底部～体部内面にはヘラケズリが施される。

#### (2) SX-01 (図25、図版15・16)

出土土器の内訳は甕5点、壺2点、鉢1点、高環2点であり比較的一括性の高い土器群である。

4は広口壺の口縁部である。口縁部は付加状口縁を有し、口径12.2cmを測る。

5・6は甕の口縁部である。5は口縁部は上方へつまみ上げられる「はねあげ口縁」を有し、6は口縁部全体を内湾させ受部を形成する受口状の口縁部を有する。いずれも胎土は在地系である。

7は短頸甕である。口縁部と体部の一部を欠損するもののはほぼ完形である。口頸部はほぼ直線的に外傾し、体部は球形を呈する。口径9.5cm、器高13.8cm、体部径12.9cm、底部径3.9cmを測る。

8～11はV様式系の甕である。13cm前後の小型品8と15～18cm前後の大型品9～11がある。いずれも最大径が体部中位から中位上半にあり、口縁部径と体部径がほぼ等しい。10の口唇部は外面に端面をもち、それ以外の甕の口唇部は丸くまとめる。すべて体部全体に成形時のタキ痕を残し、10・11には分割成形時の粘土組接合痕がみられる。

14は手培形土器の覆部破片である。復元口径は15.0cmを、残存高7.5cmを測る。天井部外面には粗いハケ調整が施される。他の土器の胎土に比して砂粒も少なく褐色を呈する精製品である。

15は鉢完形品である。体部が内湾しながら立ち上がる半球形を呈し、器高は口径よりも小さい。口径10cm、器高6.4cmを測り、内外面ともハケ調製。底部には成形時の指頭圧痕を残す。

16は高環である。環部の口縁高は体部高を凌駕し、口縁は大きく強く外反する。脚部は中空で、裾部が大きく開くのが特徴的である。口径24.3cm、器高(復元)16cm、脚部高7.5cm、脚裾部径は19cmを測る。

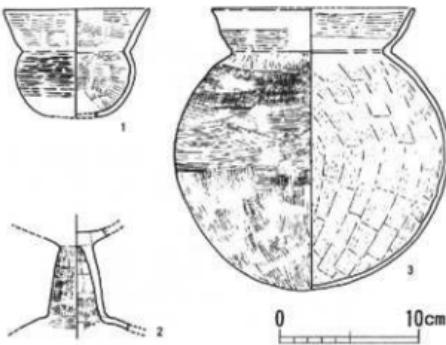


図24 SD-01出土土器実測図 (S=1/4)

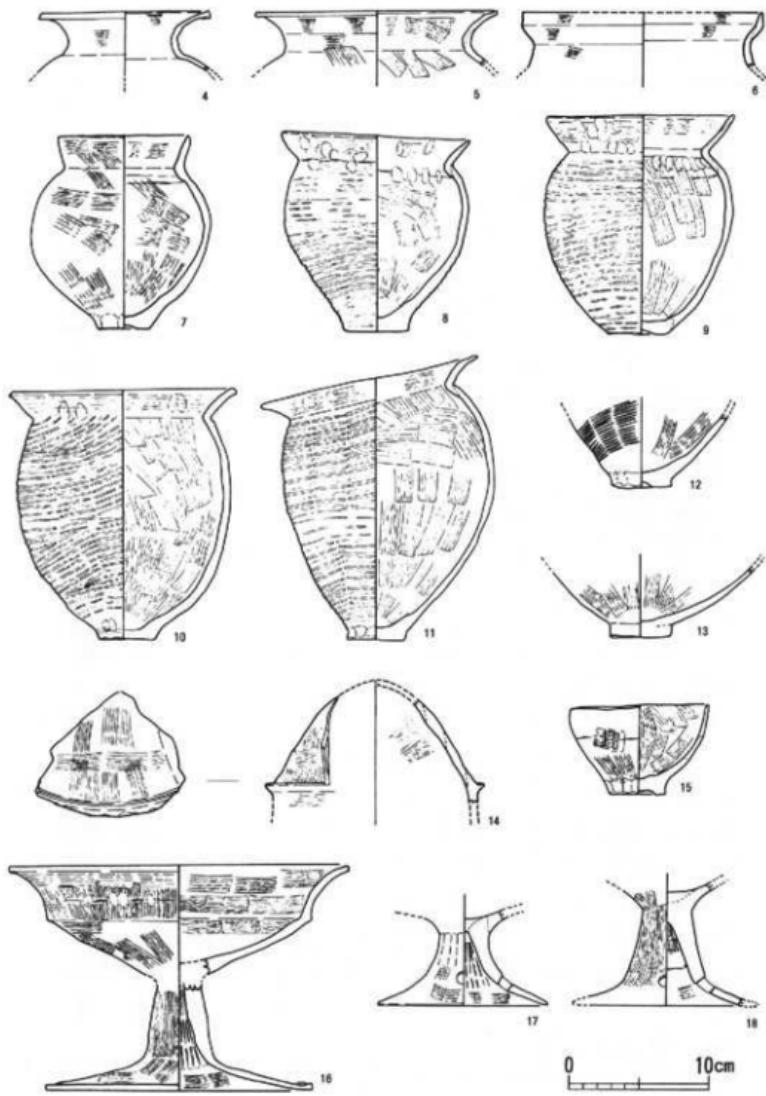


図25 SX-01出土土器実測図 ( $S=1/4$ )

### (3) SK-01 (図26)

19は鉢？の底部である。底部内面はハケ調整、底部外面に成形時の指頭圧痕を明瞭に残す。底部径3.8cmを測り、色調は灰褐色を呈する。

### (4) SK-02 (図26、図版16)

20は壺？の底部である。底部内面はハケ調整、底部外面に成形時の指頭圧痕を明瞭に残す。底部径4.5cmを測り、色調は乳褐色を呈する。

21は広口壺の口縁部～体部である。底部は欠失する。体部は球形を呈し、口縁部はほぼ直立しながら立ち上がる。口縁端部はやや下方へ垂下する。体部内外面とも横位～斜位のハケ調整が施される。復元口径11.3cm、体部径17.7cm、器高（残存値）13.0cmを測る。色調は乳褐色を呈する。

22は壺である。底部を欠失する。口縁部と体部径がほぼ等しく、他の壺に比して口縁部と体部との接合線が不明瞭で口縁部は緩やかに上方へ屈曲する。他の壺に比して器壁が厚いのが特徴的である。復元口径15.9cm、器高（残存値）15cmを測る。分割成形によるもので成形時のタタキがみられる。色調は乳褐色を呈する。

### (5) 包含層（第7層）出土土器（図26、図版17）

23～28は甕・壺等の底部である。23～26はドーナツ形底を呈し、27・28は平底を呈する。

29・30は鉢底部である。

29是有孔鉢？の底部である。突出した平底を呈し、底部には内面から直径1.1cmの円孔が穿たれる。底部外面には成形時のタタキ痕がみられる。底部径4.5cmを測り、色調は黄褐色を呈する。

30は鉢？の底部である。突出したあげ底をもつもので、外面には成形時の顯著な指頭圧痕を有する。底部径7.0cm（復元値）を測り、色調は黄褐色を呈する。

31は鉢である。口縁部を欠くものはほぼ完形である。口縁部は外方へ強く外反する。底部は平底で、口径9.4cm、器高（残存値）5.5cm、底部径3.6cmを測り、色調は茶褐色を呈する。

32是有孔鉢である。口径12.2cm、器高（残存値）7.6cmを測る。体部が内湾しながら立ち上がるものの、器高は口径より小さい。体部外面にはハケが施されるものの調製は粗く未調製の箇所を多く残している。底部には内面から直径1.1cmの円孔が穿たれる。色調は乳褐色を呈する。

33は壺の口縁部～体部上位である。復元口径17.2cm、器高（残存値）6.7cmを測る。口縁部は上方へやとがり気味につまみ上げる「はねあげ状口縁」を呈する。体部外面にはやや細目のタタキが施される。摩滅のため調整は不明瞭でヘラケズリの痕跡は看取できないが、全体的に内面は強いハケ調整により器厚が減じられており、当調査で出土した他の壺の中でも最も器壁が薄いのが特徴的である。色調は暗褐色を呈する。

34は高壺の脚部である。脚部高6.2cmを測る小型品で、壺部と壺底を欠失する。脚部は中実で内面には成形時のしづり痕を残す。外面は縦位のナデ調製が施され、色調は茶褐色を呈する。

35は手焙形土器の覆部の破片である。残存値は縦6×横4.5cmを測る。両縁には貼付突帯が巡ら

される。摩滅が著しく、調製は不明である。SX-01出土の手焙形土器（図25-14）に比して器壁が厚く、また、胎土中には粗粒の砂粒が多く含まれており、焼成は脆い。色調は乳褐色を呈する。

SX-01は全体的に土器の形態からみれば弥生時代後期後半の様相を呈しているが、とくに高坏（図25-16）に限って言えば口縁部の形態等から庄内期に近い様相を呈していることから弥生時代後期後半から庄内期のものと考えておきたい。また、SK-01・02はSX-01に近い時期。包含層出土遺物については器壁の薄い壺（図26-33）の存在から庄内期におよぶ可能性がある。

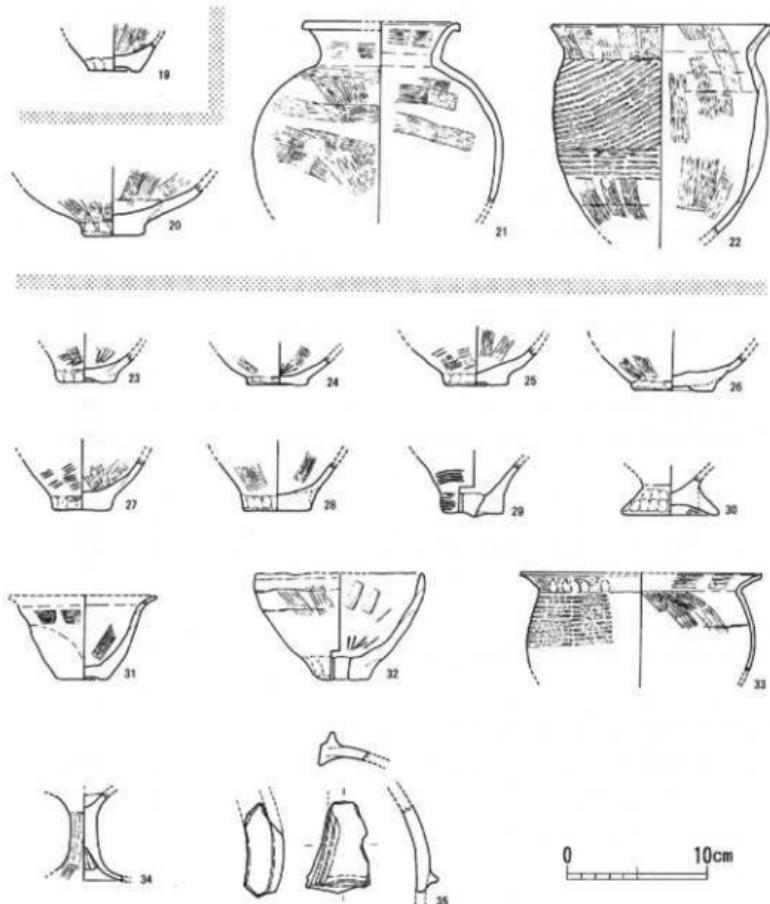


図26 SK-01・02、包含層出土土器実測図 ( $S=1/4$ )

#### IV まとめ

調査区西側には第1次調査地と同様に遺跡の焼絶時期を示す洪水に伴う砂層・礫層が各所に薄く介在しているが、中央から東側にかけてこの砂層は薄く部分的にしか分布しておらず、かわって、調査区中央部から東側にかけて弥生時代後期後半～庄内期に形成されたと考えられる第7層〔黒褐色砂質土層〕が薄く堆積していた。この第7層は調査区の東側に向かうにつれて次第に厚く堆積していく傾向があり、調査区東端からは炭粒を含む落ち込み状遺構<sup>1</sup>と上坑2基を検出した。このうち、とくに落ち込み状遺構SX-01は検出時に遺構の中央部に炭の集積箇所がみられ、住居跡の可能性を視野に入れて慎重に調査を進行したが、柱穴や周濠等の住居跡に伴う遺構を検出することはできなかった。この遺構の性格としては、中央部にかぶさ状のピットがみられるものの、住居跡にしては平面形状が不整形で判然とせず、また、当地は標高が低く、河川に近い湿地的な環境にあるために涌水が激しいことから住居跡である可能性は低いものと解釈している。

残念ながら明確な住居跡の検出には至らなかったが、単発的ながらも、弥生時代後期後半の一括資料とともに、北葛城郡域及び奈良県内でも希少な手焙形土器を2点も得ることができた。

そのうち、遺構に伴うSX-01から出土した手焙形土器(図25-14)等その他の上器の出土状況はいずれも破損しているものばかりで完形品ではなく、遺構の片隅から一括遺棄されたような状態で出土している。手焙形土器をはじめ、他の土器の破断面の摩滅度が古いことからみても当遺構で継続的に使用されたという感は少なく、他所から当地に搬入・遺棄された可能性が高い。

さて、手焙形土器についてはこれまで諸氏様々な考察があるものの手焙形土器の出土場所や出土状況が多様であるため、何らかの祭祀に使用されたという憶測以外は具体的な性格や用途等については全く不明であるが、時々、近畿地方から出土する手焙形土器に煤の付着するものが報告されている。当遺跡でも他の日常土器類とともに炭や炭化材と共に伴しており、ともに煤、すなわち、火との関わりが想定される。また、当遺構の地理的環境としては川辺に近い湿地帯的な様相を呈していることから、強いて言うならば火と水に関わりがあるものとも解釈できよう。

これらの遺構に関連する集落域の広がり等は全く不明であるが、今回の調査地より東側で実施した第6次調査では、旧河道の痕跡以外は遺物等は皆無であったことや滞水した湿地的な地質的環境であったことが想定されることから、分布域はさほど広がらず、落ち込み状遺構を中心とした調査区東端の南・北側のごく限られた地域に展開しているものと考えられる。

既往の調査結果を総合すると、当地は丘陵の先端部に位置するものと考えられ、今回の調査地東側付近が遺跡の東端に該当することが予想される。今後の開発に際しては当調査地で検出した弥生時代後期の遺物包含層の分布域の把握を念頭に置いて慎重に調査をすすめていく必要性がある。

#### 註釈

1) 否芝町教育委員会編「1989「藤ノ木」道路発掘調査概報」否芝町教育委員会

### 5-(3) 藤ノ木丁遺跡第9次調査

調査地：礎壁3丁目94-1,95-4,95-5番地

調査原因：共同住宅兼貸店舗建築

調査期間：平成6年1月15日

調査面積：20m<sup>2</sup>

発掘届出：平成5年10月22日

#### I 調査の概要

幅2m×長10mの南北方向の調査区を設定して発掘調査を開始した。調査区の基本層序は、①茶褐色砂質土層〔層厚80cm〕（盛上）、②暗灰色砂質土層〔層厚20cm〕（旧耕作土）、③黄褐色粘質土層〔層厚10cm〕（旧耕作土床上）、④灰褐色粘質土層〔層厚25cm〕（やや粘質）、⑤灰褐色粘質土層〔層厚20cm〕（地山ブロック混じり）、⑥明灰褐色砂質土層（地山）となる。

整地土層と思われる④～⑤層中から、少量の須恵器や土師器の細片数点が出土したほかは、遺構は皆無であったため、一連の記録保存の過程を経て当日中に発掘調査を終了した。

### 5-(4) 藤ノ木丁遺跡第10次調査

調査地：礎壁3丁目102番地

調査原因：共同住宅建築

調査期間：平成6年1月18日～同年1月19日

調査面積：60m<sup>2</sup>

発掘届出：平成5年10月22日

#### I 調査の概要（図版18-1）

開発地中央部に幅3m×長さ20mの南北方向の調査区を設定して試掘調査を実施した。調査区の基本層序は、①暗灰色粘質土層〔層厚20cm〕（現代耕作土）、②灰褐色砂質土層〔層厚10cm〕（耕作上）、③乳灰褐色砂疊土層〔層厚20cm〕、④乳灰褐色粘質土層（地山）となる。

各層から遺構や遺物は検出されなかったことから、一連の記録保存の過程を経て翌日に埋め戻して発掘調査を終了した。

既往の調査結果から、当調査地を含めた遺跡南側では何ら顯著な遺構や遺物等を検出することができず、また、遺物の分布密度も極めて低い地域であることが明らかとなった。従って、遺跡の範囲は現在の遺跡推定範囲よりかなり狭まることが予想される。

## 5-(5) 藤ノ木丁遺跡第11次調査

調査地：下田西3丁目21-1他

調査原因：貸店舗建築

調査期間：平成6年3月23日

調査面積：80m<sup>2</sup>

発掘届出：平成5年8月5日

### 1 調査の概要（図版18-2・3）

当調査地の西隣約50mの地点で実施した第1次調査では、流路や護岸造構など古墳時代中期の遺構や遺物が、また、本年度8月に東約100mの地点で実施した第7次調査では弥生時代後期後半の落ち込み状造構や遺物包含層が検出されるなど、当地域周辺は藤ノ木丁遺跡の中でも比較的、遺構や遺物の分布密度の高い地域であることが判明していることから、東西幅4m×南北長さ20mの調査区を設定して、地下の遺構・遺物包含層等の有無確認のための試掘調査を実施することとした。調査区の基本層序は以下の通りである。

第1層 茶褐色砂質土層 〔層厚70cm〕（盛土）

第2層 暗灰色砂質土層 〔層厚20cm〕（やや粘質・旧耕作土）

第3層 灰褐色砂質土層 〔層厚5cm〕（旧床土）

第4層 灰色砂質土層 〔層厚12cm〕（やや粘質・小礫まじり・地山ブロック含む）

第5層 明灰褐色粘砂層 〔層厚23cm〕（砂混じり）

第6層 明灰褐色粘質土層 〔地山〕

各層から遺構や遺物包含層等は全く存在しなかったことから調査面積の拡張には至らず、写真及び平面・断面図作成後、試掘調査を終了した。

### IIまとめ

当調査地では、昭和63年度に検出した古墳時代に関連する何らかの遺構・遺物の検出が期待されたが、隣地の古墳時代の遺物を含む砂～砂礫層及び、基盤層を切り込む水路等は存在せず、何ら顯著な遺構や遺物を検出することはできなかった。

今回の発掘調査やこれまでの調査知見を総合すると、本調査地周辺が地形的に西から東にかけて緩やかに落ち込んで行く二上山扇状地の微高地の中央～先端部分に相当するものとみられ、今回の調査地東側を境とした微高地周辺を地形に沿って幾条もの自然流路及び流路に伴う洪水砂層が北東に流れていることが推定される。また、丘陵末端部に向かうほど自然流路の停滞による湿地的様相を増していることから、平成5年度第2次調査地より東側は遺構は存在せず、遺跡南側を含めて藤ノ木丁遺跡の周知の遺跡範囲はかなり狭まることが予想される。

# 図 版

図版 1 今泉遺跡第1次調査・鎌田遺跡第7次調査



1. 今泉遺跡  
第1次調査  
調査区全景  
(南東から)



2. 鎌田遺跡  
第7次調査  
調査地全景  
(西から)



3. 鎌田遺跡  
第7次調査  
調査地全景  
(上空から)



1. 第1調査区内  
SD-01検出状況  
(西から)



2. 第1調査区内  
SD-01完掘状況  
(西から)



3. 第1調査区内  
SD-01完掘状況  
(北から)



1. 第1調査区内  
SD-01南壁  
土層堆積状況  
(南から)



2. 第2調査区内  
SD-02検出状況  
(西から)



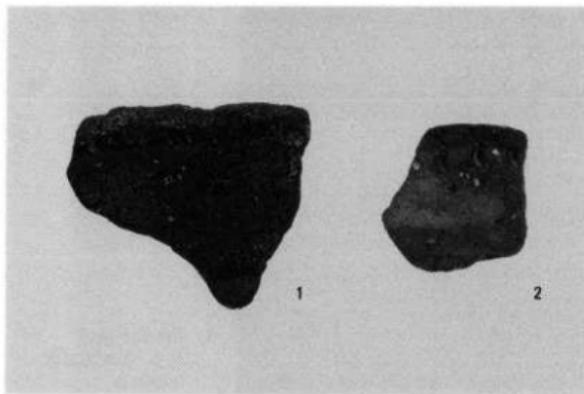
3. 第2調査区内  
SD-02完掘状況  
(西から)



1. 第2調査区内  
SD-02完掘状況  
(東から)



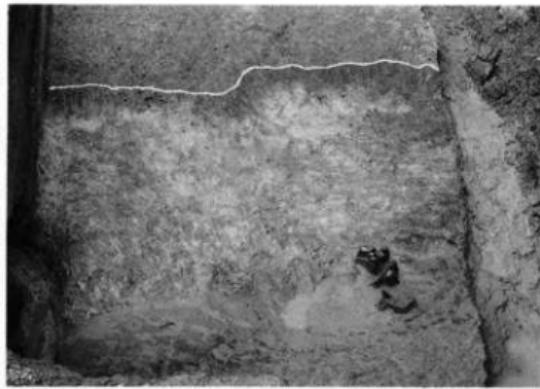
2. 第2調査区内  
南壁土層堆積  
状況(北から)



3. 第2調査区内  
SD-02出土土器



1. 完掘状況（東から）



2. 上層検出の溝完掘状況（東から）



3. 織文土器・獸骨出土  
状況（北から）



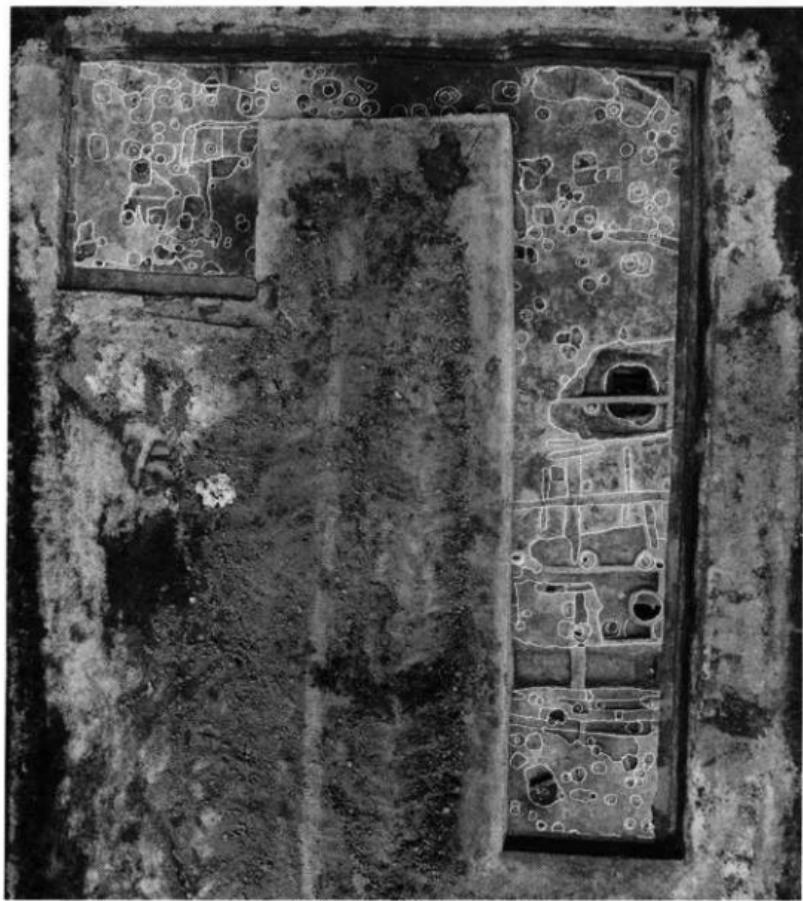
4. 下層検出の溝断面  
(北から)



1. 調査地遠景（上空から、上が北）



2. 調査地遠景（東から）



3. 調査地全景（上空から、上が北）



1. 西側拡張調査区  
掘立柱建物跡等  
遺構検出状況  
(東から)



2. 本調査区全景  
遺構完掘状況  
(南から)



3. 本調査区内  
SE-01検出状況  
(東から)



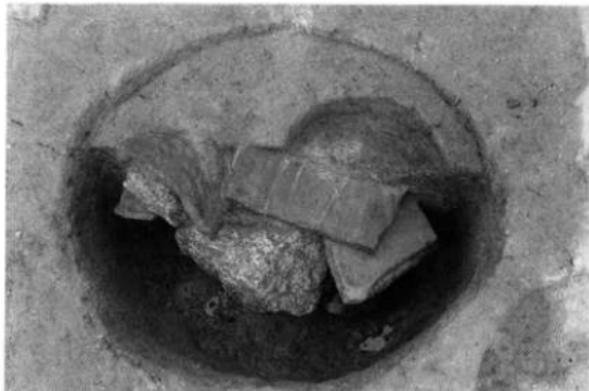
1. 本調査区内  
S E -01土層  
堆積状況  
(北から)



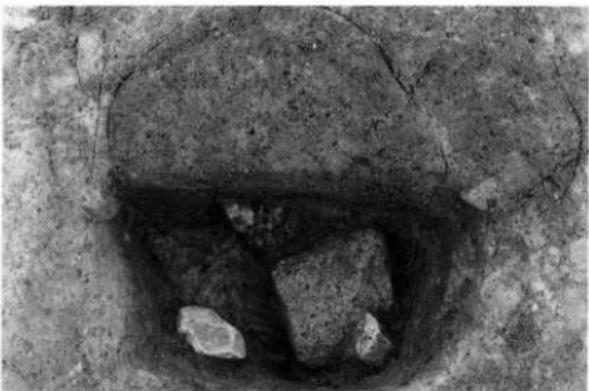
2. 本調査区内  
S E -01井戸枠  
上段検出状況  
(北から)



3. 本調査区内  
S E -01井戸枠  
下段検出状況  
(北から)



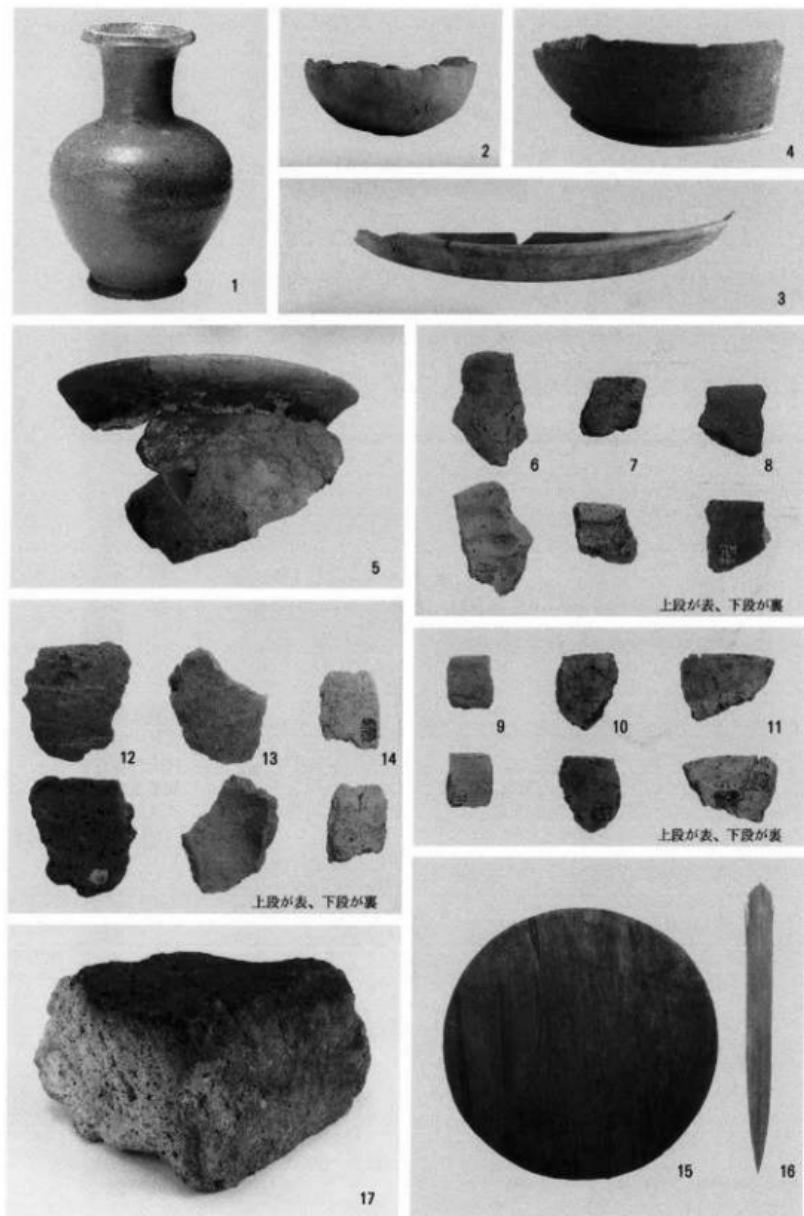
1. 本調査区内  
S B - 02  
柱穴内根石  
検出状況  
(北から)



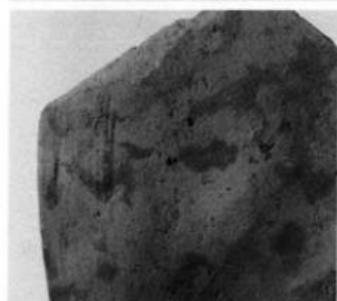
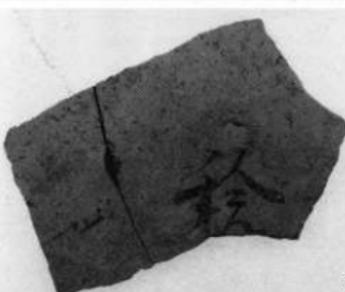
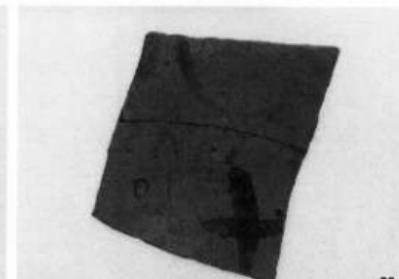
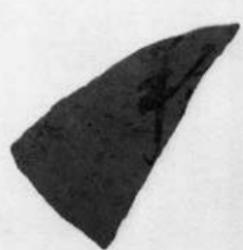
2. 本調査区内  
S B - 03  
柱穴内根石  
検出状況  
(西から)



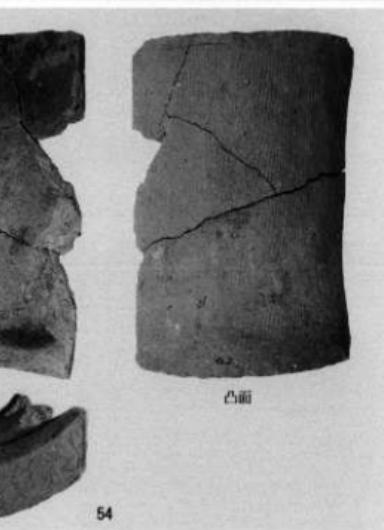
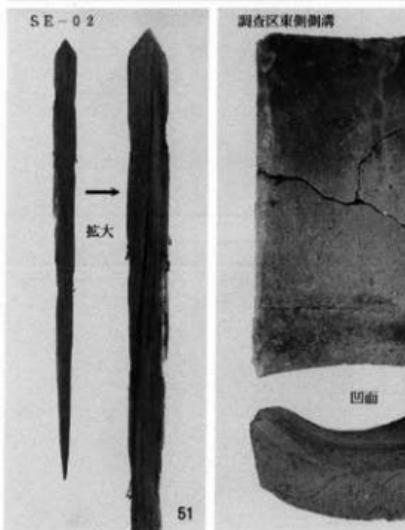
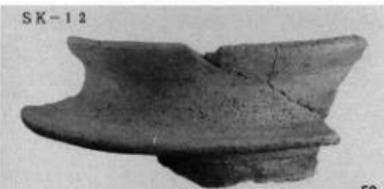
3. 本調査区内  
S E - 02  
柱穴内根石  
検出状況  
(南西から)



S E - 0 1 井戸枠内出土遺物



SE-01 井戸枠内出土墨書土器



SE-01 井戸枠外・SX-11・SK-12・SE-02・調査区東側側溝出土遺物



1. 調査区全景  
(西から)



2. 調査区北壁  
土層堆積状況  
(南から)



3. SX-01遺構  
検出状況  
(南から)



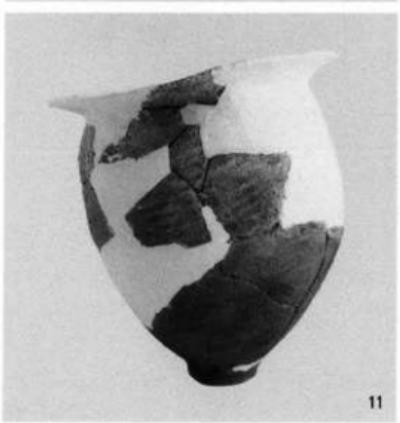
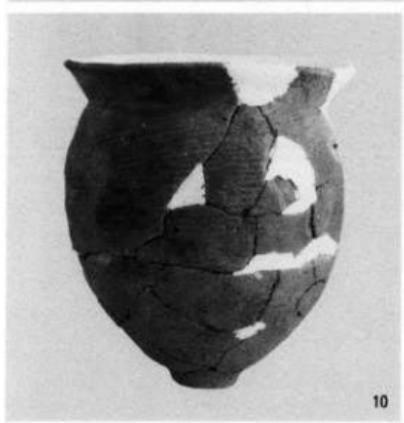
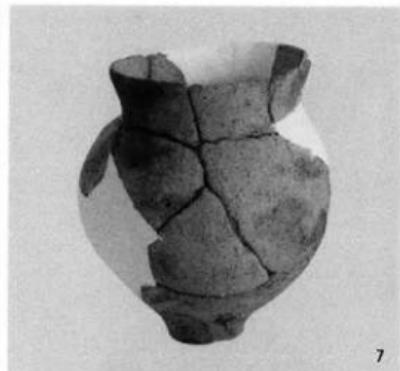
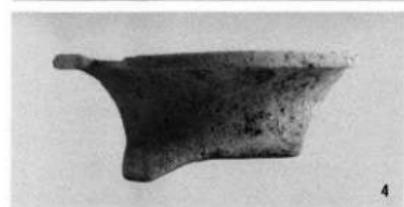
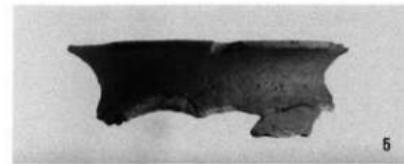
1. SX-01遺物  
出土状況  
(西から)



2. SX-01遺物  
出土状況  
(西から)

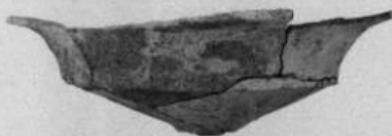


3. SX-01遺物  
出土状況  
(西から)



S X - 0 1 出土土器

SX-01



16

SX-01



17



18

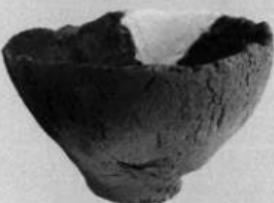
SX-01



側面

14

SX-01



15

SK-02



21

SK-02



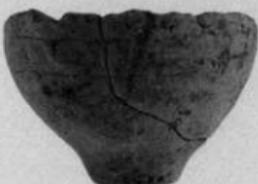
22

SK-02



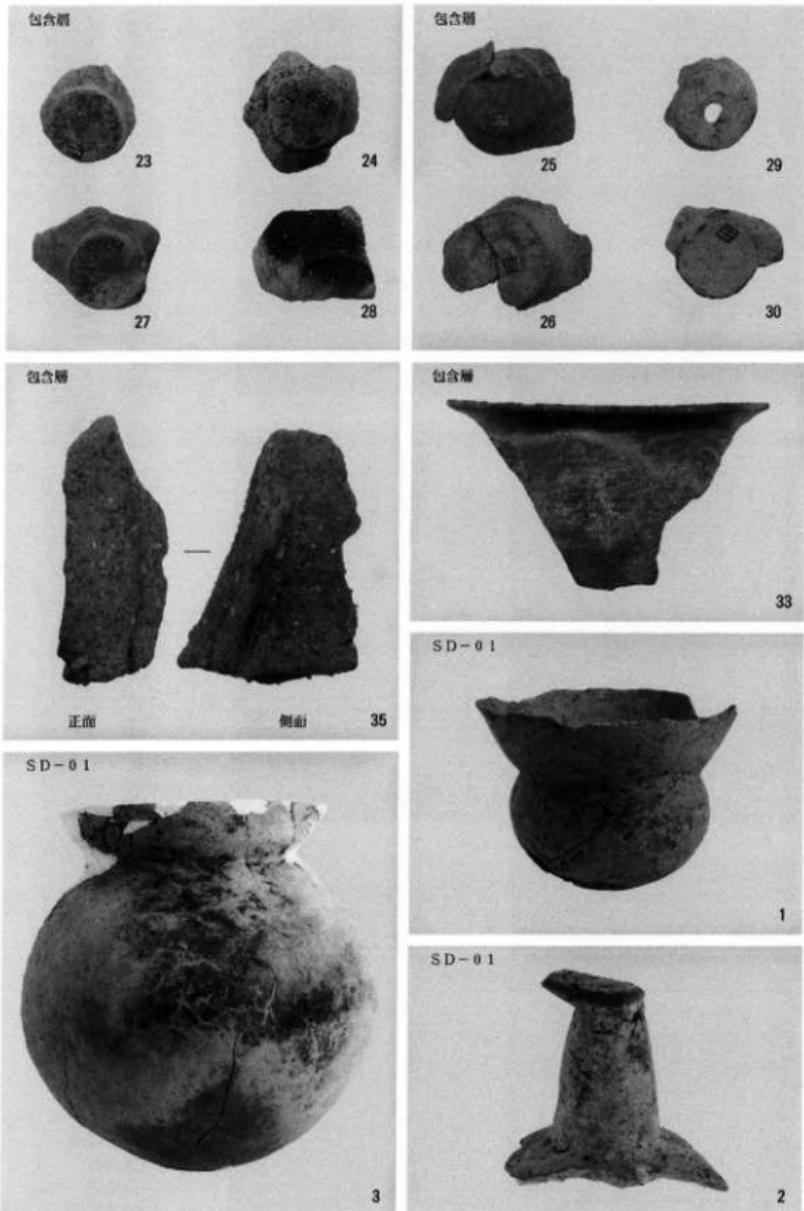
31

SK-02



32

SX-01・SK-02出土土器





1. 藤ノ木丁遺跡  
第10次調査  
調査区全景  
(西から)



2. 藤ノ木丁遺跡  
第11次調査  
調査区全景  
(西から)



3. 藤ノ木丁遺跡  
第11次調査  
調査区南壁  
上層堆積状況  
(西から)

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 2

— 平成 5 年度 —

発行 香芝市教育委員会

香芝市本町 1397番地

印刷 明新印刷株式会社

奈良市南京終町3丁目464番地